

インスパイア・チェイ
ン

メビウスノカケラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「山本、さん？」

「お前が鍋塚出汁子か」

出会い。それは志の鎖。

鎖は幾本にも連なり、重なる。繋がりもすればもつれもする。

彼ら彼女らにとっての幸不幸。全ては鎖の網模様。

これらの出会いが何をもたらすかは鎖次第。

オリジナルキャラクターが織りなす現代×異世界SFファンタジー群像劇です。

私達の住む世界に似た別世界。

この別世界で『異世界』を探す狂人と、何も知らない新入生が出会い始まる物語です。
個性的なキャラクターの出会いが生む意思の連鎖。

彼ら彼女らの物語を覗いてみてください。

※挿絵も自分で描いています。そのため、更新頻度は不定期となります。

目次

第一章 門出の角の道標

1 | 1 調査レポート 3月31日

1

1 | 2 門出の角 | 10

1 | 3 向かう先 | 18

1 | 4 打開を求めて | 29

1 | 5 道標 | 41

第二章 ∞ (相似)

2 | 1 鏡・響・狂 | 52

2 | 2 三人娘の休日 | 67

2 | 3 知るといふ事 | 81

2 | 4 予先は揃わず | 95

2 | 5 調律 | 112

2 | 6 侵された躰 | 122

2 | 7 同期完了 | 133

2 | 8 疵 | 151

第一章 門出の角の道標

1-1 調査レポート3月31日

—2025年3月31日調査レポート

発見事項 : 0

進展 : 2

先日の波形のブレを記録した例の男の身元が割れた。今年同じ学校に入学する九音栄翔だ。翌日捕縛し確認する。

同じくして翌日午後、私と同室入居となる一年が来る。鍋道楽の社長令嬢、鍋塚出汁子。噂では親とのが悪い。それが理由か単身入寮する様だ。親との繋がりが細かいのでは活動資金の徴収は難しくなるだろう。ついでのこの女も確認する。

この世には数多の謎が存在する。私が追い求める謎もその一つ。人々はその謎をオカルトと称し軽視する。

昨年、愚直に追い続けてきたこの謎の片鱗をその身で確認した。オカルトなどではない、発生する事象として見えた小さな『裂け目』。

あの日からデータをかき集め、ある程度の目星はついた。残るは発生条件を調べるの

み。

もう、彼を待たせすぎている。



桜が散り始め、始まりを感じる時節。若い心が踊りだし、鮮やかに志が芽生える。彼女にとっても例外ではない。

「……………ふう」

女子寮4階の44号室。スーツケースを傍らに扉の前で銀髪のツインテールを整えずんぐりとした少女の名は鍋塚出汁子。意を決してこれから自らが住まう部屋の扉をノックする。

「……………」

蠢く気配。口元のほくろが引き締まる口角と共に動く。

それは人の動きではない。不安を感じつつも出汁子はノブを捻る。半身ほどの幅だけ扉を開け、覗き込む形で内部を確認する。部屋は薄暗く、不明瞭さに恐る恐る声を出す出汁子。

「し、失礼しま……………!?!」

言葉が詰まる。玄関に転がる巨大な芋虫めいたそれはくるまった布団。更にそこから聞こえる高めの男性の声が出汁子の理解を深め、不可解を加速させる。

「人……男子い？ ええ……？」

布団で簀巻きにされ、口にガムテープをつけられた少年の顔。少し伸びた黒髪を靡かせながら蠢き呻き、涙目で出汁子に助けを求めていることは言葉を介さずとも理解できた。

（縄解く？ いや、女子寮に男子がいるって通報する？ ていうか何この状況!?!）

混乱し、助けることを躊躇う出汁子に少年の呻き声は急かすように強くなっていく。出汁子にもその焦りが伝播し、眉間にシワが寄る。

「……とりあえず寮母さん呼んでくる！」

「待て」

出汁子が扉を開けかけた瞬間制止する女性の声。シャワー室と見られる戸からあふれる湯気に長髪の女のシルエツト。

黒く湿った長い髪を揺らし、身を隠すこともなく下着一枚で彼女は現れた。痩せ気味で気怠げ。シャワーの後と見られる湯気により拡散する光の逆光が彼女をさながら妖怪の出現かのように演出している。

「騒ぐな。そいつは私が捕らえた」

「山本、さん？」

出汁子の予想通り、彼女が44号室の先住者である三年生の山本秋江である。

「お前が鍋塚出汁子か」

贅肉だらけの自身とは正反対の少女の体躯に思わず目が行く出汁子。羨ましい、という言葉が出る以前に目にとまる異様なものに異様さを覚える。

（左胸のあれ、何？）

彼女の左乳房上部に三原色で彩られた六角形に蔦が絡まるマークのタトゥー、そして左乳房の突端には緑輝く宝石のピアス。

（まともじゃない）

希望に満ちた理想の新生活像は何処へ。直感するもすでに秋江との接点はできてしまっている。

秋江は左手に持ったスマートフォンを右手の小指で操作し、不敵に口角を上げ出汁子に話を振る。

「さて、出汁子。お前は大手外食チェーン店『鍋道楽』の看板娘であり社長令嬢だな」
怯えた出汁子は秋江の言葉を聞き、不安が一転し敵対の気持ちを持ち秋江に向ける。

「……それがなんだというの？」

出汁子は全国展開する鍋食チェーン店の社長、鍋塚真鍋の一人娘である。

真鍋は会社経営に全てを尽くし、今や知らぬ人など居ない大企業にまで一代で成長させた成功者である。

だが、その彼の〈全てを尽くす〉という表現は比喻ではなく、出汁子にとってそれが呪いだっただ。

「その珍妙な名前、噂ではお前の父親の暴挙らしいな。更には自身の名まで改名する狂気の沙汰。それがあからこそ会社が大きく成長したかもしれんがな」

「……チツ」

名前を変えてまで鍋を前面に売り出し、娘にまで出汁子と名付ける真鍋の精神は明らかに常人のそれではないと推察できる。出汁子はこの父親の狂気を忌み嫌う。

父親の企てによりメディアに向ける宣伝用の映像に看板娘として出演させられていた出汁子。企業の知名度とともに当然出汁子の名も知れ渡る。

面白い名前だとクラスメイトから特別扱いされた小学生の頃はまだよかった。父親の出張や転勤も多く、それに合わせて自宅学習も多かったため登校日数が少なかったことも幸いだった。

自身が外れ者だと気がついたのは中学生になった一年目。この頃『鍋道楽』は上場し、本社のビルを一新したばかりであった。父親は本社にて常勤するようになり、出汁子も

合わせて学校に登校する日が大幅に増えた。それが出汁子の転機だった。

(コイツもそれだ。名前が変だ、父親が社長だからっていい気になるなだ、お金目当てでちやほやしてくるやつだとか。私を惨めな気にさせて何が楽しい)

周りは権力を恐れていたのか大きいじめに合うことはなかったが、出汁子の中学校での三年間は陰口と擦り寄りの板挟みであった。思春期真っ只中の彼女にとつてとても堪えるものであった。

自分の心がこぼれたアスファルトの様に歪に固まっていくのを感じた。出汁子はどうしてもこの状況を変えたくなくなった。

(わざわざ遠方まで寮のある高校に入学して、今までと同じ状況じゃ意味ないのよ)

出汁子は高校入学に備え、そんな相手に言う言葉を決めていた。

「私は私よ。名前は大人になったら変えるし父親とも縁を切る。上っ面でしか物を見れないなんて可愛そうね」

「お前を卑下するなどつまらん意図で話などせん」

言い切ったが一蹴され、うまく行かなかった違和感により出汁子の眉間に更にシワが寄る。言い返そうと声を出そうとするもすかさず秋江の言葉が入る。

「お前の情報は高くついたぞ? 出汁子よ」

「じ、情報?」

メガネを掛け、長い髪を青いリボンで首元にまとめながら含みがあるような事を言う秋江。戸惑いつつ、負けじと出汁子は睨みつける。

メガネをつけた秋江は再度スマートフォンを操作し始める。クククと不敵な笑みを上げる様を見て、出汁子は得体のしれぬ悪い予感を感じる。

「秘め事を多く持たないとは中々、お前は妙な奴らしいな」

「何の話を」

秋江はくるり、画面を出汁子に見せる。

「本当はこれ以上に過激なものが欲しかったのだがな。プロですら手を上げる隙の無さ、驚きだな」

「……!?!?」

写っているのは出汁子であった。それも入浴中や脱衣中の裸体の状態、乳房や陰部、食べることが好きだとわかる豊かすぎる全身の肉。何の遮りもなく露出している写真が複数枚。どこから仕入れたかわからぬ金でプロの写真家を雇い調達した物である。

出汁子の人生史上、未曾有の羞恥と恐怖だった。全身が熱く火照り、同時に鳥肌が立ち冷や汗を流す。とっさに出汁子はスマホを奪い取ろうと手を上げ打つ。しかし秋江のバックステップが空振らせる。

「お、お前ッ!」

「バックアツプは取つてあるとはいへ、携帯端末を壊されてはたまらない。短気は損気だぞ、出汁子」

秋江にとつても不意打ち気味だったのか、彼女は少々顔を強張らせながら寝転がる簀巻きの男に飛び乗るように腰掛ける。男はその衝撃で出せない声で叫びを上げ、動かなくなる。

そして、秋江は足を組み再び不敵な笑みを携えて口を開く。

「これは脅迫だ。今日からお前は私と同室で生活をする傍ら私の助手として研究の手伝いをしてもらう。誰かに告げ口したり、意固地になつて従わない場合は今見せた写真を世に流す」

「……ッ!!」

出汁子が再度ぶつ体勢に入ろうというその時、秋江の手元が閃光と乾いた刺激音と共に出汁子に向けて突き出される。

「バックアツプは取つていと言つているだろう。無駄なことはするな、痛い目にあうだけだぞ」

それはスタンガン。稲妻の強さが並みではない改造品。触れば即気絶、当て所が悪ければ肉が焼ける。それほどの代物。

目を見開き体が固まる。つうと頬に汗が一筋伝う感触で気づいたかのように、出汁子

はゆっくりと手を下ろす。

「……お前、お前もそういう人間か。道具のように人を扱って、自分勝手に、自分の事ばかり」

食いちぎらんばかりに歯を食いしばり、涙を滲ませ怒りの形相を秋江に向ける。へ腸が煮えくり返る」という言葉を体現した顔である。

しかし、秋江は出汁子から目をそらすこと表情を変えることもなく、スタンガンで秋江が出てきた戸の方を指して出汁子を急かす。

「最初にお前がする事はシャワーを浴びることだ。身を綺麗にして下着一枚で戻って来ること。お前の身体検査を行うぞ、出汁子」

「……さいつてー!!」

出汁子は脂の乗ったその脚で地団駄を踏む。いささかの揺れを錯覚するほどの音が鳴った後、出汁子は俯きながらシャワー室へと体を向ける。

(最低だ最低だ最低だ)

父に宣材道具として扱われ、その父から距離を置くためにやってきた学校でも使われる。惨めな状況は何故変わらぬのか。

悔しさが嗚咽に変わる。不満と怒りが涙に変わる。渴望する自由という言葉を彼女は、知らない。

1—2 門出の角

私立有智学園高等学校。その入学式の翌日。各クラスでの自己紹介と学校生活についてのオリエンテーションが行われた。予定通りに各説明が終わり新入生たちは開放される。

オリエンテーションが終われど新入生には大切な時間がまだ残っている。教師に指示され行った自己紹介などでは理解しきれぬ互いの情報共有の為にクラスに残るものは半数以上。

そのクラスの生徒達も一見その通りの動向。しかし、彼ら彼女らの話題は他のクラスとは異なっていた。

「鍋塚出汁子ってすげえ名前だよなあの子」

「CMとかポスターで見たことあるわ。鍋道楽んとこのボンボンや」

話題の中心となる事が決定されたその名と生まれ。彼女自身は教室に姿はない。新入生たちは本人が居ないことを良いことに好き勝手に喋っている。

「デブだし、目つき悪いし、しかも何あの自己紹介？」

「外面だけで判断しないでください」つつたつて、人間第一印象だよねー！」

「一瞬教室変な空気になったしねー。松野くんもそう思うよねー?」

「オレは良くわかんないな……まあでも見たことないタイプだよ。気になるよね」

「チツ……」

地響きと錯覚させる程の足音を立て、ニーハイソックスの食い込みで浮き出た腿肉を揺らして廊下を突き進む。居心地が悪いという顔の彼女こそ話題の中心点。

周囲からはヒソヒソ声。殆どが出汁子のただならぬ雰囲気への反応。今の出汁子にはその全てが自分に対する好奇の現れに聞こえる。

(学校じゃコレ、帰ればアレ、入学しなかったらソレ。コレじゃダメなのに、クソ……どうにかしなきゃ)

考える。考えたところで一人ではどうにかできる事は多くない。

理不尽に積み重ねられる問題を一つでも打壊したい。そうは思えど思い浮かぶ案に對して対処をされるパターンばかりが容易に想像できる。思考の堂々巡り。混濁していく思考。

「なあ、鍋塚出汁子!」

混沌とした思考に投げ込まれる声。高めでははっきりとした語気の男の声。

「ああ!」

よりもよつて姓名合わせて呼ばれば気持ちには抑える間もなく沸点にまで達する。自分の名は嫌いなのだと主張するかのごとく、苛立ちを隠さず後ろを振り向く出汁子。

そこに居た声の主は音楽がそんなにも好きなのか、校則など気にしないとばかりに首にヘッドホンをかけた黒髪色白の華奢な男子。背丈は出汁子とあまり変わらない。

「俺だよ、九音栄翔！ 同じクラス！」

「……ああ、ヘッドホンの」

彼はヘッドホンを担任に注意され、出汁子より先にクラスの自己紹介で教室をざわつかせた男だった。それは出汁子にも印象的な光景であった。

「ああ、そうなるよな。俺はコレやめないけどな、絶対」

栄翔は少々の戸惑いはあるものの、出汁子の鬼めいた気迫に目をそらすことはない。その栄翔の態度がわからぬ出汁子は警戒心を解かぬ姿勢であったが、ふと頭に過る事があつた。

「アンタ……?」

「そうなんだよ!」

引つ越した日、秋江に簀巻きにされていた男子の顔が栄翔のそれと一致している事に出汁子は気がつき、それを察した栄翔は嬉しそうに自分の顔を指差して確認を促す。

険しい表情が解れた出汁子。腰に手を当て改めて不機嫌な表情へと顔を変え態度を柔和させる。

「改め、簀巻きヘッドホンね」

「九音栄翔だつて……まあいいや。名前のことなんかより大事な話があるんだよ」

仕返しとばかりに返された妙なあだ名は気にしない。一転し真剣な面持ちになる栄翔は出汁子の目を見て訴えかける。

出汁子は彼の態度に戸惑いつつ、しかしそう時間はかけずに彼の心中を察する。

「からかいに来たわけでは無いのね」

「するかよ。これ食べながら屋上で昼食がてら話すぞ」

栄翔の手にはコンビニのビニール袋に入った三個入りの小さいクリームパン二袋とパック入りのコーヒー牛乳が二本。

「タダじゃないけどな。俺、一人暮らしだし」

「もちろん。私も借りは作りたくないから」

会釈や合図をするでもなく二人は同時に歩き出す。彼と彼女の意思も言わずとも同じ。

「あの女を何とかしなきゃ」

「この学校生活が全部台無し、だな」

「パン代はタツパンワンクレ、約束したかな」

「わかったけど、タツパンって何？」

春先らしく、日が照ると眠気を誘う暖かさに心地よい風が屋上には広がっている。昼食を食べ終わり、昼寝をしては居られないと二人はゆつくりと立ち上がる。

しかしながら食事が二人のリラックスを生んだ。食べ慣れぬが好きな味だったと出汁子は心で満足し、クリームパンが四個半とコーヒー牛乳が投げ込まれて一層ぼつてりとしたお腹を擦る。

「……やっぱりツークレにしてもらおうかな」

栄翔は「よく食べるな」と言いかけて口を閉じる。よく食べることは事実ではあるが、出汁子はその手の言葉には敏感である。

「三月からジョギング始めたから」

鋭く栄翔をにらみ、自分だつて頑張っているのだと強調するようにパツパツの太ももをパンと手で鳴らしてみせる。肉のぶつかる音になんとも言えぬ栄翔は苦笑い。

そのやり取りがスイッチとなり、二人は一呼吸追いてお互い向き直る。

「気を引き締めなきやね、お互い」

「ああ、俺達の青春ってやつスタートラインを超えないとな」

血走る二人の目。怒りを溜め込んだ心が体にまで伝播し体温が上がっていく。二人して握りこぶしを固く握り、入寮日の事を思い出す。

「あいつには意味もなく弱みを握られている。まさか、あんたも同じ状態だとは思わなかったけど」

出汁子はその日その後、服を脱がせられ体の隅々まで秋江のその手で弄られ、写真と共に様々な身体の記録を計測されていた。

データは多いほうが良いからという理由を述べていた秋江に対し、何のデータかも説明もしない事も含め、出汁子は当然ながら脅迫のための材料を増やすためだと思つてゐる。

そして、同じくして栄翔も簀巻きにされるまでの間に裸体の写真を収められていたのだ。出汁子はその事実を今日知った。

「歩いてたら背中に衝撃が走つてさ、何だと思つたら気絶してしまったみたいでさ。それで起きたら知らねー場所で裸にされてたんだ。抵抗しようとしたらスタンガン出してくるとかさ、ヤクザじゃねえかって……」

栄翔は相当に恐怖を覚えた。思い出すだけで身震いを起こす。

「あの女も言っていたけれど、アンタから電波が出てるだなんて素っ頓狂もいいところよね」

「ホントだよ……俺を捕まえた理由を聞いても「お前から観測した波形が異常だった」だよ。波形つてのは俺のヘッドホンの音漏れじゃねーのか？ だったらとんだとばっちりだよなあ、ちくしょー！」

栄翔は立ち向かうのが怖かった。スタンガンに対してや裸の写真を撮られ所持されていることへの支配されている感覚。それを吹き飛ばすかのように栄翔は大きな声を出す。

出汁子も同じ恐怖を感じていた。声には出さないが、自らの両手のひらを見つめて決意を固める。

「言つとくけど、警察は本当に最終手段だからね。警察から父親に知られると会社のイメージを下げかねないとかでこの学校を強制退学させられるのも目に見えているから」「わかっているよ。それに事が事だしな。大事になつて悪い奴らに俺たちのアレソレを知られたら最悪ネットのオモチャにされる。なるべく俺たちで事を済まさなきゃな」

互いに似た境遇である事が二人に勇気をもたらす。

「門出の角にうづくまつてじつとしてなんていられないからね、九音」

「もう他人じゃない、栄翔でいいよ。俺達でやるぞ出汁子」

非常な状況下、二人の絆はまだ固くはないが確実に生まれていた。奇妙にも二人の心には親しみが湧き、気がつけば軽い笑みが生まれていた。

「……さて、この後帰つてからの事をおさらいをするぞ」

「ええ！」

口元を締め直す。互いに目を合わせ頷く。

昼食中に善は急げと話をした結果、二人の知恵をかけ合わせ即興で作戦を練った。記憶に彫り込むように唇に意識を集中させ復唱しあう。

そして、二人は拳を突き合わせる。

1—3 向かう先

スガノ町。人の行き交うサブカルチャーの街。大衆に話題のゲームから知る人ぞ知るコアなグッズを取り扱う所まで、幅広い種類の店舗がそこかしこにある。

当然ゲームセンターも存在する。その一つがSANGOSTEーションスガノ一商店。音楽ゲームの筐体の調整が全国の中でも高水準で、音ゲーマーの間で聖地と称される店舗である。そこに向かうために出汁子と秋江は最寄り駅、国営地下鉄スガノ駅から徒歩での移動を始める。

「何を企んでいるのやら」

帽子を深々とかぶり、動きやすいからと身に着けている不似合いなニツカポツカの裾を揺らしながら秋江は足早に進む。秋江よりも十センチほど身長の高い出汁子でさえ速歩きになるスピード。

「せ、先輩。待ってください」

まだ春先で気温も上がりきらない時期。しかし汗かきな出汁子の衣服は湿り気を帯びていく。膝下までの長さのスカートが足取りを邪魔をしていることもあり、出汁子の息遣いは荒くなっていく。

事の発端は出汁子。栄翔と話し合った作戦の場、それがスガノ一号店である。

寮に帰った出汁子は栄翔が秋江に襲われた際の事を交えた作り話を秋江に話し、ゲームセンターへと誘い込む。作戦決行の第一歩の提案を秋江が何も迷うこと無く飲んだ。

その秋江のすつかりとした態度に出汁子は少々の不審を覚えていた。そんな気持ちに呼応するかのごとく秋江は口を開く。

「九音栄翔の主な活動場所だ。そしてお前たちは同学年の同級生。口裏を合わせて復讐するつもりかな」

共同作戦の存在を勘付いたと言われているも同然の言葉。しかし、怖気については負けと出汁子は出任せに言葉を連ねる。

「九音と話をしたのは事実ですが、先日栄翔が捕まっていた理由が気になって話を聞いていただけです。あと、同級生のよしみで先輩が知らなかったことも聞き出しています」

「屋上に怪電波が流れているという話。ゲーマーの間でまことしやかに噂されているという。たしかに初耳だが」

秋江は振り向き出汁子に向き合う。その瞳に籠もるは確信。

「電波や音波の噂は特に私が注視している分野だ。それを私が知らぬはずがない。私も怪異に精通しているはずがないお前達が知っていたと？」

口元がへの字に曲がる出汁子。それを見て秋江はほくそ笑み追撃の言葉をぶつける。「お前達の思惑などたかが知れている。袋小路に連れ込んで二人がかりで私を押さえつけるなり脅すなり。そんなところか」

出汁子の眉間に皺が出たのを確認し、納得したかのように再びゲームセンターの方向に身体を向ける秋江。

自分の企てを察知しつつも何故向かうのか。矛盾する行動の意味を出汁子は理解できず、焦燥感に堪えきれず秋江の肩に手を伸ばす。

「この人だからでどうするつもりだ？」

行き交う人が一瞬足を止めて二人に目をやる。物々しい雰囲気を出してしまったと出汁子も気づき、秋江の肩から手を放す。

「もう少し、客観的な視点を持つべきだな出汁子。感情的に手を出すのも良くない。それでは暴徒と同じだ」

「嫌味……」

「なんとでも。ほら、お前達の用事をさっさと終わらせるぞ。気分を晴らして大人しく私の手伝いをしてもらわねばならん」

不快だと隠すこともない目つきを向けられども秋江は怯むこともなく移動を再開する。出汁子はそれでも為す術もないとは思いたくない。荒げた声を投げかける。

「先輩ヅラ？ 気晴らしに付き合っただけでやっていると？ 優しさ見せてやってるって？」
 「そう思いたければ思え」

出汁子の悪態は淡々と処理される。びくともせず上から目線の秋江の態度にますます苛立ちを覚えていく出汁子。

「目的って、なんだよ。いい年こいてオカルトなんて追いかけて。信じてるの？」
 「この身で体験した事に信じるもなにもない」

ついには人格否定の言葉が飛び出す。それでも秋江は振り向くことも間を作ることもない。動じない。その上に狂人めいた返しをしてくる。その秋江の態度は出汁子の苛立ちを増幅させる。

(体験したって、そんなわけ無いだろチビ)

言葉に詰まらせた、困った顔をさせてやりたい。兎にも角にも自分が優位な所を一つでも作りたい。そうでなければ打開の一手も見いだせない。

「赤ん坊でもつかないだろ、そんな嘘」

もはや悪あがきである。これでは捨て台詞だと思いつつも吐かずには気持ちのやりようがないと行った様子が出汁子。ついでとばかりに秋江を睨みつける。

しかし。

「嘘ではないっ！」

「！」

振り向きはしない、だが今日一番の音量で発せられた秋江の声。この日まで感じたこととの無い怒気に、出汁子は目を見開きたじろぐ。

怒気は伝播し、当然周囲も秋江に注視する。出汁子はいたたまれなくなり不快を感じる。

（感情的になるな、客観的に自分を見ろとか言ったの誰だよ）

不平不満は増加の一途。言葉の投げあいとは停止、二人は怪訝な目をかいくぐりつつ街を進む。

SANOGOステーションスガノ1号店一階ではクレイニングゲームを始めとした数多の筐体と景品が客を惹き付けてやまない。新春の時節に合わせた、新規層の開拓を目的とする景品取得ゲームプレイ回数倍増のイベント開催の日故に普段より大きい人だかりができています。

一方、青天井のフロアに続く屋内立入禁止の非常階段。イベントの開催の影響によりスタツフは一階に多く割かれ警備が手薄に。よって二名の侵入者を許している。

「どうした？ 息切れしているぞ」

「……うるさい。体重いんだよ」

汗と荒い息を垂れ流し階段を上る出汁子は、上段にいる秋江を恨めしく見る。

「見立通りならこの上に九音栄翔が待ち受けているのだろう。さてさてお前達は何をす
るんだ？」

そんな出汁子を秋江は屋上を指差して急かす。お前達が始めたことだと物言う冷たい眼差しと共に。

（くそ、お前一人で私達をどうにかできるつての？ ふざけてる）

奥歯を噛みしめる。こちらの作戦はほぼバレているというのに秋江の手の内は何も見えない。策略にはめようとしているこちらが秋江の手のひらの上で動いている感覚。そのせいなのか出汁子の息遣いが収まらない。

秋江の有利に傾くのではないかという不安と焦燥感。軽く吐き気まで催してきた出汁子の脳内回路はひたすらに稼働し続けている。

過るのは先程の秋江の怒声。触れてさらなる怒りを買ひ窮地に陥らされる事も考えるが、すでに謀反を起こしている。今更になにを臆することがあるかと出汁子は口を開く。

「……こんなほら話のために、私達が怯えるなんてバカバカしいのよ」

怒声を引き出した〈嘘〉の指摘。出汁子にとっての今できる唯一の反撃。

「……何？」

秋江は振り向き、そして出汁子の下へ寄ってくる。出汁子はこれを好機と見、開く口を止めることはしない。

「あんたが勝手に妄想して作り出したファンタジーに振り回されるなんて——」

「ごめんだ、と言い切るつもりであった。秋江が出汁子の目の前に立つ。出汁子が合わせるその目、深く寒さを感じる影が宿っている。

直後、乾いた音が閉鎖された階段に響く。

「つた……何すんだよ！」

出汁子は頬を押さえて語気を強め、秋江の胸ぐらをもう片方の手で掴む。秋江はただ冷たく言葉を返す。

「頭ごなしに否定をすれば私の逆上を誘えると思つての発言だろう？ 望み通り、私は今怒りを感じている」

不敵に笑みを浮かべながら、秋江は胸ぐらをつかむ出汁子の小指に触れる。

「あ？」

「私の精神的な隙を作り出すための、その場しのぎ的な浅ましい考えだ」

瞬間、出汁子の小指は手の外側に捻られる。

「ぎゃあ！」

出汁子は痛みにたまらず胸ぐらの手を放す。放すタイミングが早かったので小指は

折れるまでには至っていない。それなのに痛みはすぐには収まらない。

「気が済むまで抵抗すればいい。お前の企み程度いなす事は容易。だが、私の求めている怪異を否定することは許さん。私が見聞きした実在する事象だ。覚えておけ」

「……っ！ いやあ説明できるのか？ お前が体験したってそのオカルト、ほんとに起こったって証拠！」

痛みとアドレナリンが体中を駆け巡る。出汁子のストレスは叫び声と共に最高点に。

その怒りと同時、秋江はシヨルダーバッグからおもむろにクリップで挟んだ複数枚の紙の切片を取り出す。

「証拠、と納得するかはさておき」

淡い青色をした紙の切片の束。秋江はその一枚を引き抜くと左手で出汁子の右肩の上にかざす。

「もう一度仕置が必要だな」

秋江の眉間にシワが寄った瞬間、鋭い破裂音が鳴る。

「ぎゃっ!？」

閃光や熱は無く、にも関わらず出汁子の襟元から右肩にかけての服が弾け飛ぶ。右肩にも平手で叩かれたときのような痛みが広く発生し、赤みを帯びてくる。

「……っ！ なんだよ、それ」

混乱をごまかすことが出来ず、出汁子の喉は引きつり冷や汗が吹き出る。痛みで抑える手も震えが収まらない。

「私の〈心の力〉に呼応し、紙の中に封印されたパワーが解かれる。超常的な現象を利用した護身用の道具だ。胡散臭い雑貨屋から譲り受けた」

解説をしつつ、秋江は紙切れをひらひらと見せつけるように揺らしている。不思議なことに紙の色はクリーム色に変容している。

「切れ端にしてかさ増ししているとは言え、使い切りの貴重な品を使っただ。これで信用しないか……？」

秋江は出汁子の顔に自身の顔を近づける。

「ひっ……」

出汁子はまた痛みを与えられるのだと恐怖を感じ目を瞑る。

「……………？」

数秒間瞼の裏に引きこもるも何も起きない。出汁子は恐る恐る光の世界に戻る。すると秋江の顔は眼前。

「すべてが終われば何もかも手放す、お前も解放する。それまで私を困らせるな、怒らせるな」

秋江はまっすぐに出汁子の目を見つめて言う。無表情に近いが眉間に険しさが顕れている。ふと、出汁子はその瞳に今まで秋江に抱いていたものとは違った印象を感じる。

秋江は十数秒の間出汁子の目線を捉えた後、静かに振り向き屋上に歩みを戻す。

「……ねえ！」

咄嗟。出汁子は衝動的に秋江を呼び止める。

「科学で説明し難い力は今見せた。これ以上なにか？」

再度秋江は足を止める。振り向かず出汁子の言葉を待つ。

秋江の出方を伺うため少し間を置き、息を呑んで出汁子は言う。それは怒りや焦りに混じる好奇心。出汁子の心の沼から掬い上げた気づき。

「その態度、半分は狂ったフリだ」

そして、秋江は首を僅かに後方に向ける。

「お前の目、父親の目と少し違う。辛そうにも焦っているようにも見えた。脅迫や暴力を

使つてでも私を従わせようとするのに、だ」

「それがなんだ？」

「目を見て、それで気になっただけ……私は父親以外をよく知らないからかもしれない」

出汁子にとって秋江は父親以外で関係を持った初めての人。この事実こそ出汁子の反発の大きな理由である。

出汁子は引つ越し前日の事を無意識に想起する。強く生きると決意し引き締めた心の裏、今までになかった出会いへの期待の存在。

秋江との出会いは最悪であったが、それでも今までに無い他人との関わり合いの始まりであった。今度こそ人との繋がりを持ちたいという気持ちはその出会いで拗れ、根を張り、今この瞬間では人格と癒着しつつある。

「なんか言えよー」

とはいえ、出汁子は秋江に対する心の変化には気づけていない。ここまでの仕打ちの怒りも消えるわけもなく、厳しい語気を纏わせて秋江を急かす。

そんな出汁子の心根が見つけた自身への違和。関係を持つ相手の悪意を見定める心の眼に秋江は背を向けたまま。そして僅かに締まっている口元に気づき、気持ちをごまかすように口を開く。

「世間知らずだろうと侮っていたが、意外だな……この後で知りたいことを教えてやる。行くぞ」

結局面と向かうことはなく。秋江は最後の階段へと足をかける。

「……チツ」

1—4 打開を求めて

扉を開け、屋上に出るや秋江は声を張る。

「九音栄翔、出汁子と二人で私を懲らしめるのだろう」

その声に被せて秋江の出てきた塔屋の屋根から水塊が降り、秋江に命中する。被つていた帽子は水で落とされ、その下の秋江は当然のごとくずぶ濡れ。口の中にまで水が入りこむ。

「……なるほど、私の一手をまず封じたか」

秋江の口には塩の味。塩水まみれ、秋江の肌も衣類も荷物も全て。これが意味することを秋江は理解する。

「お、おりゃあー！」

突然の水の落下を出汁子は知らなかったが、秋江に戸惑いによる隙が出来る。それを逃さず出汁子は両手と自身の体重を使って扉の側から秋江を押し出し、逃げ道を塞ぐように扉の前に陣取る。

「電気伝導率は知ってるよな？」

栄翔が塔屋の屋上から顔を覗かせる。してやったと口角の上がった表情が逆光で映

える。

「栄翔、聞いてないんだけど！」

「びつくりさせちゃったな、悪い！ だけどこれでその電撃女のスタンガンは使えない。感電はしたくないだろうからな！」

梯子で屋上から降りながら栄翔は自分の閃きを誇る。一度やられた自分だからこそ思いついたのだと自慢げな顔をしている。

塩水は通常の水とは比較にならないほど電気をよく通す。その中で加減を間違えば肉を焼くほどの威力を持つスタンガンを用いれば自滅も必須。

「まあ、そっちだつてバレちゃってんだし、だつたら予想外なくらいがこの後もやりようあるだろうと」

降りきる前に梯子の途中から飛び降りる栄翔。少しバランスを崩すもすぐに出汁子と二人で秋江を挟み撃ちにする位置に駆け寄る。

「油断は駄目。コイツ底知れない！」

さつきまでの階段のやり取りを思い出し、出汁子は栄翔に注意をうながす。栄翔は領きつつ、懐からカートンテープを取り出し構える。

「だから二人がかりなんだろう！ 出汁子、押さえるぞ！」

栄翔が言った直後、秋江は鞆に手を伸ばそうとする。

「……………」

その動きを察知していたのか、出汁子は背後から秋江の腕を全力でつかみ取り押さええる。秋江は抵抗しなが、出汁子と秋江の腕力は拮抗している。お互いの顔に焦りが滲む。

「さっきつ……手の内見せたの、まずかったわ、ねっ!」

屋上に出る前に見せられた青い紙切れの謎の衝撃。出汁子は当然警戒、鞆からできるだけ腕を遠ざけさせようと上に向かって秋江の腕を引っ張っていく。

「そのままだ、出汁子! 手えぐるぐる巻きにする!」

栄翔はテープを剥がす音を鳴らし、迂回しながら出汁子のいる側に駆け寄る。

「髪にテープつくから暴れんじゃねーぞ!」

「この……………」

秋江は反動をつけて出汁子の体ごと近寄った栄翔の方向を向き、その反動も利用して股間につま先を突き刺す。

「あびやつ!」

その場で崩れ落ち、股間を押さえうずくまる栄翔。

「え、栄翔っ!」

「男に襲われることは、慣れているのでなっ!」

続けざま、前方に跳ぶように地面を蹴る秋江。出汁子は体重を後ろにかけて逃がさない体制。

「させな……」

それがまずかった。秋江の脚は軽く浮く。僅かながら前から後ろへの振り子の動きが発生、秋江はその勢いに合わせて足裏を出汁子の方に伸ばす。

「うぶっ」

出汁子の下腹部にかかるとがめり込む。鈍い痛みに出汁子の顔から血の気が引き、手を離してしまう。

そして、秋江の動きの反動エネルギーはまだ残っており地面は濡れている。出汁子の足はその勢いに留まりきれず、秋江が上になるように二人重なって倒れ込む。

「塩水には少しは焦ったが、素人どもでは」

うづくまる出汁子を背に秋江は立ち上がる。数歩離れたあと、余裕とばかりに重ね着しているシャツを二枚とも脱ぎ、上半身には下着を残した姿で水分を絞り始める。

おもむろに服をコンクリートの床に広げたあと、鞆の中身のチェックもし始める。スマートフォンはボタンを押せども画面は真っ暗のままうんともすんとも言わない。他、スタンガンやノートなどを濡れていない床に広げていく。

「……スタンガンにスマートフォンがやられた。どう責任を取ってもらうかな」

「……自業自得、だよ」

うめき声かのような声で背後から秋江に悪態をつく出汁子。下腹を抑えながらもなんとか状態を起こしている。

「とはいえども活動を止めることはできん」

「強がつてんのかよ」

「……強がりでもしなれば、心が持たん日々を過ごしてきた」

秋江は空を見ている。その秋江の背中を見て出汁子は階段での秋江の目を思い出す。狂気で隠した暗い気持ち。その正体が薄っすら感じとれる寂しげな背中。

「兄さんと同じ空を見たい」

「……?」

らしからぬ単語。他人や身内の話をする事などなさそうだという印象を持っていた秋江の口から出た兄という単語に面を喰らう出汁子。その空気を感じつつ、秋江は出汁子の方に向き直る。

「茶番は済んだらう。私の事を教えてやる」

「……こんな状況で?」

地べたにへたりこんむ出汁子に目線を合わせるため。秋江は出汁子の目の前でしゃがみ込む。秋江の無神経な行動に出汁子は戸惑いが隠せない。

「知りたいのだろう。それに、約束は手早く消化したい」

「イカれてる」

「聞かずともよい」

秋江の瞳はまた階段で見つめ合った時と同じものとなっている。秋江のペースに合わせる義理などないとは思いつつも、今の言葉と秋江の瞳の違和感を確かめたいという好奇心が出汁子の中で広がっていく。

「……聞くだけ、聞く」

目をそらしつつ頷く出汁子を確認した秋江はその場であぐらをかく姿勢に体勢を変え、少しの溜めを入れたあとに口を開いた。

「私には兄がいた」

秋江は自分の左の手のひらを見つめる。

「死別や生き別れなどの家庭の事情ではなく、消えたんだ。私の記憶と先ほど見せた怪異の力を残して」

「消えたって……」

出汁子の反応は気にする事なく手のひらを見つめ続け、目を伏せたまま秋江は過去の体験を語り始める。

「七つの頃の私がかくならない理由でせがみ、裏山に二人で出かけた。当初は日が差して

いたが、気がつくとも方向感覚を失う程に霧が濃くなった。戸惑いの中、目の前で強烈な閃光が発生して……一瞬間が裂けたのが見えたところで兄さんは私の前に立ってかばった」

秋江の伏し目の表情を見ながら出汁子は話の内容を疑いつつも黙って聞いている。閃光、霧、消えた兄など荒唐無稽な単語が並ぶが、淡青色の紙片の衝撃が記憶に新しい以上はいくらかは真实性を考慮して聞かざるを得ない。

「私は気を失い、気がつくとも病院の天井を見上げていた。安堵した表情の親が私の顔を覗き「一人で何をしていたんだ」と言った」

左の手を膝の上にやり、そして空を見る。陽光に照らされた顔にはここまで見せなかった寂しく切ない気持ちが見える。出汁子は黙って聞き続けている。

「私は兄さんと一緒に行つたと、何度もその日の事を話した。話す度に馬鹿げた話だと一蹴された。親の中で「兄がいる」という事実そのものが欠落している様子だった。やがて私を異常だと決めつてあんな……いや、この事は今はいい」

首を横に振り、空から顔を下げ再び出汁子に目を合わす。青天の空とは対称的な陰しさを瞳に帯びさせ、過去の自分に語りかけるように。

「兄さんはその存在そのものが消えてしまった。だが私は一時たりとも忘れなかった。せがんだ私を恨んだ、悔やんだ、そして納得できなかつた。だから、兄さんを探し出す

ために十年手を尽くしてきた」

出汁子はその瞳に吸い込まれる様に見て聞いて。自らの考えと照らし合わせるために口を挟まず聞き続ける。

「十年。兄が一人でいる時間、私が一人で探すにも限界を感じざるを得ない時間。閃光と空間の裂け目の調査は小規模なものを観測できるまでには至ったが一手が足りず。あの日手に入れた怪異の力も護身程度の役にしか立たず。あと一手、私以外の人手と考え方が必要と感じた」

そこまで言つて、話し終えたという様子で秋江は立ち上がり、ズボンに付いたゴミをはたく。出汁子も蹴られた痛みがましになったので、合わせて立ち上がる。

「……ハッ、それで？ 傍から見ればイかれてる事だからまともに話して協力する人は居るはずない。だから何も知らず、一人で、それでいて自分の手に及ぶ範囲にやって来る……そんな私を脅して従わせようって」

腰に手を当て態度を大きく、しかし屋上に来る前とは違つて焦りが消えた表情の出汁子。含みを持たせた笑みが溢れる程にはリラックスを持っている。

それを見抜いているのか、秋江も警戒心なく腕を広げて柔らかい態度をとる。

「理解したな」

「納得はしてない。本当のこととも思えない」

秋江との奇妙な絆が構築され始めていることを感覚で理解りかけている出汁子。悪態はつけどもその声色に先程までの険しきは無い。

そしてその感覚に気付く。怒りはその感覚に勝るものではなくなっていると感じ、絆されては自分の自由はないのだと気を引き締めるようにわざと険しい顔付きになる。

「終わりじゃない。写真、絶対消してもらおうよ」

一呼吸置くと秋江を背にして栄翔のいる方向に歩き出す。痛みが引き始め、栄翔はあぐらをかいてうつむいている。

「……ほら、栄翔。今日は何やってももうダメ。帰るよ」

「うう、クソっ……思いつきり蹴りやがって。なんか耳鳴りまでするし」

「男ってこういう時は不便ね。ほら、立って」

出汁子は栄翔に右手を差し出す。へたっている理由が気恥ずかしいと思いつつも手を取る栄翔。

秋江は二人のやり取りを見、用事は済んだのだと判断。床に広げた服がもう少し乾くまでの間に床に散らばった鞆の中身を元に戻す。スタンガンはバッテリーと本体を分けて安全性を確保、スマートフォンはボタンを押して起動するかを再確認。

「…………お」

付かなかったスマートフォンが息を吹き返し、画面には光が戻る。秋江は安堵のため

息を吐く。

直後、スマートフォンから警告音が発生する。

「!!」

画面に表示されている通知一覧のトップに映るアプリのアイコンは正弦波のマーク。テキストには大きな波のうねりを感じと出ている。

それと同時に。出口に体を向けた出汁子と栄翔。

「痛すぎて聞こえた耳鳴りかと思っていたけれど……なあ、出汁子。なんか聞こえねーか？ みよいんみよいんって？」

栄翔は出汁子の顔を横から覗き込む。不可解に聞こえる鉄の板がしなる時のような音が出汁子にも聞こえるかを確認するために。

「……………」

「だ、出汁子？」

その出汁子の顔色は先程までとは打って変わって青白く、明らかに気分が優れないといった様子であった。

「お、おい、大丈夫か……」

栄翔が心配し体を支えようと手を伸ばした所で出汁子は膝から崩れ落ちる。

「だ……………!!」

直後、出汁子の体から無数の光線が発生する。光と同時に衝撃が発生し、栄翔は秋江の居る方に吹き飛ばされ転がっていく。

「な、なにイ!？」

警告音を聞きすぐに背中を光と風が通り過ぎる。即座に反応し出汁子の方に振り向く秋江。

「あ、あ、ああ……」

虚ろな瞳でへたり込む出汁子から発生した光は弧を描き、空中の一箇所に集まっていた。それぞれの光は何かにつつかったかのようにその場所に到達すると弾ける。

「あの時と、同じ……っ！ 霧も出ていないのだぞ!？」

秋江はその弾ける閃光に身の毛をよだたせる。忘れたことのないあの日見た強い光が再度目の前にあるのだと。

「おいおいおい、どうなってるんだ出汁子っ!」

栄翔は体制を立て直して出汁子に呼びかける。心配に恐れのお感情の混じったうわずった叫びを投げかける。

「なにこれ、何よ、これ……なんなの、よ……!」

出汁子の全身から力が抜け、視界は白に染まっていく。やがて、意識は曖昧になり、視界と思考の境界線は消える。

出汗子は光となった。

1—5 道標



——どうなったの、私。

光の白。浮遊する意思。肉体の存在は曖昧、掬うと霧散してしまいそうな存在。ぼんやりとした感覚がだんだん鮮明になっていく。

「……とは……にいられない。さよ……ら」

音。若い女性の声。聞こえるだけのはずなのに、意思の中に意味として響く。

——知らない声……誰の、声？

疑問に思う間に声は増えていく。その女声だけではなく男声も混じって言葉が重なっていく。

「姓も……よう。それがい……コ、素晴らしいと……だろう」

「正気じ……の名前だよ？ ねえ、どうし……」

「この子は『出汁子』。我が社の……となる看板……」

男性の声は知っている。

——父親の、声？　じゃあこの女の声は母親の声、なの？

声は止まらない。

「必ず幸せにする……ヨウ……」

「こんなに好きになるもりじゃなかったんだけ……」

「さあ、式場に行こう」

——こんな声色の父親の声、聞いたことがない。なんでこんな、優しいんだよ……
声を聴く内に自らの意識も鮮明になってくる。段々と何者かの顔が浮かび上がってくる。

「丁度、君みたいな人を探してたんだ。飲みに付き合つてよ、奢るから」

「……こんなうだつの上がない男に声をかけるなんて、物好きな女だね」

「ねえ待つてよ」

それは銀髪のショートヘア、赤い目をした鋭い目つきの女性の顔。

——似てる。

「私の名前はヨウコ。あなたは？」



「っただあつ!？」

突如、出汁子の左頬に本日二度目の痛みが発生する。

「起きろ！」

秋江が出汁子の顔を覗き込む。秋江の右耳の側には右の平手が構えられている。

「うおおおつ!？」

平手打ちの体制だと即座に察知し、三度目はたまらないと素早く状態を起こして出汁子は回避する。間髪入れず暴力に対して怒りの声。

「な、何しやが……」

しかし、その怒りを超える勢いで秋江が胸ぐらを掴み、出汁子は怒りは忘れてしまう。

「出汁子、何をした」

「……は？」

尋常ではない剣幕。怒りか焦りか驚愕か、判別はつかない圧力を出汁子は感じる。詰められる覚えがないという様子の出汁子の様子を察知、秋江はため息を一つ。

「後ろを見る。とぼけた顔も吹き飛ばさず」

「後ろ……?？」

そういえばと、出汁子は後ろに何やら不穏な感覚があることに気がつく。触られてい

るような、揺れているような、生きてきて今までに感じたことのない空気感。

胸ぐらを離され出汁子は恐る恐るとばかりにゆっくり振り向く。

「な……何よ、これ」

この空間に別の空間が浮かんでいる。有機的な膜に穴が空いたように空間が裂けて、そこが別の空間へと距離無く繋がっている。

「見た通りではあるが、私は『裂け目』と呼んでいるものだ。いる場所から離れた空間との距離を無いものにしてしまう空間の乱れだ」

裂け目の向こうに見えるのは暗い何かの部屋。概ねの人々が見たことのない様な機械が存在する。人はいないが、奥にある機械仕掛けの扉の方から声や扉を叩くような物音が聞こえる。

「これまで観測してきた小規模なものとは比べ物にならない。違うのは向こう側の場所が随分と文明的である点か」

秋江が考え込む傍ら、裂け目はゆっくりと閉じてゆく。扉を壊そうとしているのか、音はどんどん激しくなっていく。

その様子を出汁子は息を呑んで見ていることしか出来ない。秋江も頭の中を独りごちり、冷静さを保っている様子。

「今までの裂け目の向こう側はすべて自然物や石造りの建物の内部だったはず……目の

前に突入できる大きさの裂け目があるというのに、クソ……」

裂け目は人が通れる大きさではなくなる。そして、扉から火花が散り、こじ開けられる様子が見える。

こじ開けられた扉からは数名の女性の影。一人がこちらに駆け寄って来る。こちら側から差し込む光の反射で薄い空色の髪色であることがわかるが、近寄り切るよりも早く裂け目は閉じきってしまう。

「……………」

出汁子はただ啞然とするしかない。だが、そんな暇など与えられはしない。

「全て、お前の体から発した光が起こした現象だ。態度を見れば自覚がないのは見て取れるが、心当たりもなにもないのか」

明確な焦りの表情と声色で出汁子に問う秋江。その様子を見て出汁子は先程自分に起きた変化を思い起こし振り返る。

「な、ないない！ 私だって、何がなんだか……気分が悪くなって、目の前が真っ白になって……それで父親と私に似た人のやり取りを光の中で聞いて」

「……関係あるかわからない情報だな、クソ」

期待したものは得られず、秋江はうなだれる。

「ひとまずはその情報と……あそこに居る〈三人〉の事も調べる必要があるな。それか

ら、周囲の記憶の相違と霧が発生しなかった事についても」

「……三人？」

三人。出汁子は秋江と栄翔と自分の三人を思い浮かべる。だが、秋江は自分の背後を指差して三人と称している。

その指差された先を出汁子も振り向いて確認する。

「裂け目から現れた。随分焦っている様子だがな……」

三人。確かに三人いる。一人は栄翔。もう二人は少女。

「……………」

出汁子は口を開いたまま固まってしまふ。そこに三人いた事よりも大きな衝撃によるものである。

二人いる少女は二人共殆ど裸のような格好をしたあまりにも町中にそぐわない外見。片方はハート型のニップレスで隠した顔より大きな乳房二つを紐で吊るす意外に機能のないフリフリの下着に通し、スカートとは認識できないスカートを身に着けた、長いオレンジ髪ツインテールのメガネ少女である。

だが、それ以上に出汁子の目を引くのはもう一方であった。

パニーガールスーツ風のカップ部を持つチューブトップ様の服装に、ファッションでパンツの紐が見える様に腰に布を巻いた少女。腰まで伸びた髪は黒く、艶めいて輝く。

オレンジ髪の少女よりも常識的で控えめなボディラインであるが、出汁子は彼女に、彼女の顔に注目せざるを得ない。

「え、栄翔が、二人っ!？」

おどおどしているオレンジ髪の女性の前で壁になる形で栄翔と相対しているもう一人の栄翔。栄翔と同じ顔をした少女。双子や鏡写しという表現がよく似合うほどである。

栄翔はと言うと、警戒しきつて口を開かず睨むばかりでしかいられない様子。もう片方も同じく眼を見合うだけ。

そんな膠着状態を解き、事態を動かすために秋江は立ち上がる。三人に体を向けて近寄っていくのを出汁子はとっさに後をつける。

「出汁子、これでお前も無関係ではなくなつた」

「……納得も理解も、できないわよ」

唾を飲み、余裕のない自分を奥底に封じめる。そして、目の前で起こつた現実を受け止める。他に無い。事実を歪められないこと、事実から見ないふりをして何もしない事を出汁子は知っている。

先程までの怪異的な現象。特に自分が引き起こしたという裂け目の発生と光の中で見た幻影。これらは出汁子の混沌とした心の海の底を見せた。

(私は……私って一体〈何〉なの)

自分の存在の謎。表層にある自身の名前の謎。自身の出自の謎。果ては自身の存在の正体そのものの謎。自身に関する悩みやコンプレックスが全て謎へと変わる。

闇雲に考えを巡らせたり行動したりするよりも遥かにわかりやすいと、妙な高揚感を得る出汁子。

(……コイツとあの母親らしき女がその鍵を握っている。私が知りもしない私に関する超常現象の、その正体を暴く鍵を)

前を歩く秋江の背を見る出汁子。ここまで真実とは微塵も思わなかった秋江の発言の意味はガラリと変わってしまった。

この女に着いていくしか無い。今はそうしなければ謎は解決できず、自分の心は惨めなまま。もはや出汁子にとって脅迫などさしたる理由ではなくなっている。

加えて、出汁子の秋江に対する心情の変化が起こっていた。
(ここまでの話が本当なら、コイツは一人でここまで何もかも知ってきたって事なのよ

ね……)

自立しようと一歩踏み出したばかりの出汁子の目に映る今の秋江。羨みもあれば憧れもあるような、大きな存在に見える。

(……私だって)

空を見上げると青天に飛行機雲が伸びている。その遙か彼方にある行く先の地。その場所のことは彼女にはわからない。

「……ああ、もう！」

だから、彼女は行く先に向かって精一杯吠えた。



「他人の前では私のことは『会長』と呼べ。私はオカルト研究をしているとして掲示板に情報提供のチラシを張っているのな。活動しているという素振りをしなければならん」

「ええ……なんで？」

数日後の学校の廊下、放課後になって人があふれる中、二人で並んで歩く出汁子と秋江。新入生は出汁子に、上級生は秋江の姿に反応して目を合わさないようにしている。

「生徒会や教師共に部活動でなくともきちんと活動をしていると認識させる。行く行くは同好会にしたいと言うと熱意とやりに絆され見逃してくれる」

「はあ……」

しかし二人は気にする様子はない。秋江はもとより、出汁子は入学初日に感じていた

被害妄想がすっかり聞こえなくなっている。

「それから、まだ身近な奴らを調べた結果に過ぎんが、周囲の記憶の齟齬は今のところ見られない。断定できるほどではないが、裂け目が原因ではない可能性もありうるな。霧が裂け目発生の条件に必要なかどうか……はすぐにはわかりそうもない」

「まだその辺も何が何だかわからないんだけど……」

話していると目的地に着く。そこは科学室のドアの前。

「本当にいるの？　です？」

「覗いてみる」

出汁子は音を立てぬようにドアノブをひねり、数センチだけドアを開け覗き、何かを見るやいなやぎよつとした顔ですぐに離れる。

「ほんとにいる……」

出汁子が見たのは少女。裂け目からやってきたオレンジ色の髪をした少女と瓜二つの顔。違うのは裸眼で髪が短く、胸は大きいものの二回りほど小さい所。

「二年、理系クラスの永野みゆき。ルーナのコピー元と断定できるだろう」

「それで、どうするんすか。残り二人の事もあるし」

「奴ら巨乳三銃士共の写真を撮り、それをパッヘルとルーナ両者に確認を取る。奴ら毎日三人で下校をするはずだ、底を狙うぞ」

秋江はシャッター音のならないカメラアプリを使い、スマートフォンで出汁子の顔を撮り見せる。

「巨乳三銃士ってあだ名……ていうか盗撮。ほんと最悪」

露骨に嫌悪感を見せる出汁子。しかしそれ以上に楯突く素振りはない。

二人して息を整え、同時に周れ右。

「さて、行動開始だ。写真は私が取る」

「……まあ、やらなきやならないもんね。私は先にマーベル・アグリでルーナ達の話聞いておきますよ、会長」

そして、同じ方向を向いて一步を踏み出す。彼女らが向き合う怪異への道標、それを探し求めて。

二人はオカルト研究会『MYSTIC』。

第二章 ∞ (相似)

2—1 鏡・響・狂

「ホチシメソシマンソンワウニ、エシフサハメトトカウニノオツヨフフノヘトンタシソ
ン」

言語。この世界のどこにもない言語。それは、暗がりの中で腕部に装着された端末機器に話しかける男の声。

すぐ側では床面を高速で踏む音。機械に腰掛け、まさに機嫌が悪いと言うかのように眉間に皺がよっている女。貧乏ゆすりで小刻みに揺れる巨大な乳房とは裏腹に、その体軀はさながら女兒の様に小柄である。

「ねえ、まだあ？」

「瑠璃。ネビデの充填が不十分なまま起動しては事故が起こる。マニュアルは読み込んでいるはずだが」

不満げなその女を瑠璃と呼ぶ男も同様に身長が低く、しかしその身長とは不釣り合いなほど完成された肉体が白いワイシャツ越しにも見て取れる。身長以外にも顔の作りと青の髪。性別こそ違えど二人の肉体は類似している点が多かった。

「んなもんは知ってる！ だらだらまどろっこしい報告をしているのがイライラするって言うってんの！」

「毎度言わせるな。データは正確に記録する必要がある。音声記録、座標記録、映像記録、気象、スペクトル、ネビデ……」

淡々と表情を変えることもない男の説教めいた説明に、瑠璃はその態度が気に入らないと言わんばかりに床を強く蹴り上げ立ち上がる。

「あーあー！ うるさい！」

「……またか？」

血走った眼で服を脱ぎ男に迫る瑠璃。男は目をそらすでもなく、体を凝視するわけでもなく、瑠璃の目線を追う。

筋繊維で彼女の肌には影が複雑な形で出来上がっている。脈動し、汗が滲み始めている彼女の体は男に訴えかける。

「わかってんならさっさと相手しろ頭でつかちのカス！」

下着一枚の姿で身構える瑠璃。脇を締め、拳を頭頂部と同じ高さに掲げ、ソワソワとステップを取り始める。瑠璃の吐息は早くなり、口角は上がりっぱなしになる。

男はそれに応える様にネクタイを緩め、瑠璃に対し半身になり構える。

「まったく、君は本当に仕様が無い」



「……………」

整然とした窮屈な部屋。ヘッドホンやペンライトなど、音楽好きの部屋と認識させる多くの物品。それらは壁に設置された格子状の金網にきれいに飾られており、ブラインドから差し込む朝の光芒により薄っすらと照らされている。

部屋を狭く感じさせる大本、デスクトップパソコンが鎮座する机に向かうのは九音栄翔という黒髪の少年。この部屋の主は彼であるという事は、タンクトップにトランクス一枚とそこにヘッドホン着用という無防備な格好が示している。

「思いつかないや」

エナジードリンク、モンスターガイザーのシトロンフレーバーを口元で傾け、残るひとくちを喉に流し込む。調子が乗らないのだと、彼は最近毎朝これを飲んでい

る。原因は自覚していた。

（あの音、なんだったんだ）

事は数週前、ゲームセンターの屋上で起こった怪奇。同級生の少女の肉体から閃光が飛び出し、空間が裂けたあの日。

その少女、鍋塚出汁子が発光を始める直前に彼は音を聞いていた。金属板がしなる音のような規則的で不可解な音は、耳ではなく思考に直接響く不思議な音であった。

（俺以外には聞こえてなかったみたいだけど……くそ、気が散って仕方がない）

残響がある気がして、それが事の蠢きへの懸念を強める。あの日に、出汁子とは絆のよ
うなものが芽生えたが、出汁子と関わり合いにならず大人しくしていれば……と関係を
否定する気持ちが脳裏に浮かんでは振り払う事にも心が揺らされる。

しかし極めつけがある。同じ日、謎の音以外に彼にとつても重要であろう大事件が起
こっていたのだ。

（あいつ……パツヘルって言ってたっけ）

自分の顔。鏡合わせのような同じ顔。空間の裂け目から現れた少女の焦った顔がそ
れだった。そして少女が切羽詰まって話した事は何かから何まで突拍子のないものであ
り……

と、栄翔が思案にふけっていると、スマートフォンにメッセージの通知が入る。

《今日カフェ来いよ。忘れんな！》

メッセージの主は松野。出汁子と同じく栄翔の同級生。先の怪奇とは全く無関係、だ
が栄翔とは同じ部活に入った間柄である。

「……はーっ」

ため息が部屋に満ちる。居心地の良い一人だけの時間が毒だと感じる。その重い気分を振り払うように、栄翔はドリンクの缶をゴミ箱に投げ入れ、勢い任せに立ち上がる。クローゼットから乱雑にシャツと黒い上着、ズボンを取り出し身につける。ベルトで固定した腰巻きには財布やペンライトなどの出かけるために必要な私物がすでに収納されている。

「まともな答えが返ってくるとは思わないけど、あいつにも相談してみるか。あいつ、オレにはないモノ持ってるし」

そうして、身支度を終えた彼は玄関の戸に体を向けた。



サックスとピアノ。店内スピーカーから流れるジャズに混じって来客を知らせる鐘の音が鳴る。住宅街でも目立つ虹のかかった看板には、一推しの商品らしいプリンアイスと店名が記されている。

その喫茶店、プリズムプディングに入った栄翔の目にまず待ち受ける壁の右手奥、店長のメガネコレクションがずらりと並んだ縦長のショーケース。傍らには片眼鏡の女性の写真が控えめに飾られている。

「お〜い。こっつちこっつち」

ショーケースのガラスの反射、アイボリーの癖つ毛の少年が手を招いている。それを確認した栄翔は少し不機嫌な素振りを作り、ショーケースを横切つて3つあるテーブル席の最奥側を目指す。

先客である彼が栄翔の同級生であり軽音楽部の相方、松野明良である。水色の瞳で栄翔を見つけるとルーズな袖を振り回しながら栄翔に相席を促している。

「遅いつてー！」

焦らせようと、松野は大きさにテーブルの対面を指さす。

「急に呼び出しといてさあ」

そんな松野の突然の呼び出しに不満を垂れてはいるが、しかし渋ることなく対面の席に座る栄翔。一人でいるよりかは全然いいと、窒息しそうな部屋での気分を思い出して一息ついた。

松野はすぐさま店員を呼ぶ。ショーケースの写真に写っていた片眼鏡の女性店長は「ちよつと待つてね〜」と注文伝票を準備し始める。

栄翔は、ダイニング側の壁にずらりと並んだティーカップのコレクションや入り口のショーケースなど、店長の趣味が詰まった店内の独特な雰囲気は何気なく見ている。松野はそんな栄翔の顔を覗き込む。

「なんか栄翔さ、上の空だけど終わったの？」

「ああ、まだ」

軽音楽部の初ライブが次週に迫る二人。世に出ている楽曲のカバーライブとはいえ、部長の意向によってアレンジを加えてのパフォーマンスを求められている。

しかし栄翔はその楽曲の編曲に手間取っているのだ。怪奇のこと、同時に聞こえた音の事など気持ちが悪うろつき、アイデアが浮かばないのである。

「なんだよ、もう来週だろお？」

栄翔の浮かぬ様子に若干の呆れを見せる松野。栄翔はバツが悪そうに眉をひそめつつ、腰巻から折りたたみの鍵盤デバイスとスマートフォンを取り出しテーブルに置く。

「間に合わせるって。今日中に片付けるよ」

スマートフォン上でアプリを起動し、鍵盤デバイスを操作する。首からかけたヘッドホンから音が聞こえ、栄翔はよしと呟く。

栄翔の準備が整った様子に安心し、松野は両手を頭の後ろで組んで体を伸ばす。

「頼むぜ」

「お前も手伝え！」

松野の無責任に何時ものように叱責する栄翔。同時に店長が注文を受けに来た。少

し気恥ずかしげに栄翔はミルクココアを、松野はストレートティーとクリームブリュレを注文すると、店長はにっこりと笑顔を返す。

「かしこまりました！」

ダイニングに戻る店長に会釈しつつ、二人は目を合わせて本題へと気持ちを切り替える。

「ほら、松野もイヤホンつけろ。できてるところまで確認するからさ」
「りよーかい。待ってろ」

栄翔はスマートフォンを松野の無線イヤホンと同期し、編曲の進捗を二人で確認する。ワンコーラスを二曲分、ロックとポップスのEDMアレンジ、その途上の曲に二人は聴覚を研ぎ澄ます。

数分の時が流れた。二人がヘッドホンとイヤホンを外すとほぼ同時、店主が注文の品を運んでくる。

「では、ごゆっくり。いつもありがとうございます」

店長のウインクに松野は少し頬を染めて会釈をする。栄翔も会釈をするが、編曲中の譜面に目線を取られている。

どうにも浮かかない顔の栄翔。そんな彼に松野は先程の曲の雑感を伝える。

「最初の方に聞いたのより元気ないよな。なんかあったの、栄翔」

「お前、わかんの？」

適当言ってるだけではないかとの疑いの目で松野を見る。その反応に松野は得意げに親指を立て栄翔に突きつける。

「あきらか元気ねーじゃんか。お前も曲も。音楽だつてオレも勉強してんだぜ？ なんとしてもオレの歌で射止めたい子がいるんだからな！」

「あー……あいつ？」

松野が示すその子、それは栄翔にも心当たりのある同級生である。

「出汁子ちゃんはさあ、初めてオレがイイって思った子なんだ。他の女子がオレに見せないあの目つき、堂々とした肉付き、ドライな態度！ 振り向かせたいじゃんか！」

「まあ、うん。そうだな……」

鍋塚出汁子。松野の片思いをしている少女であり、そして栄翔の不調要因に関わる重要人物の一人。

元々から松野は中学生の頃から高校生での部活は軽音楽部に入ると決めていた。その甘いルックスと無邪気な性格で中学の頃からすでに異性からの人気が高かったが、モテたいという自己顕示欲は消えることはなかった。それで選んだのが軽音楽部であった。歌を歌えば女の子は自分に更になびくようになると、勝手に確信していた。

そんな高校生活に胸を膨らませ、入学して早くも女の子に声をかけときめきを振りまいていた松野。だが、出汁子はその声かけにも「よくわからない、あんだ」の一言で一蹴。その日、松野は痛烈な敗北を味わせてきた出汁子を特別に意識をし始め、言い表せぬ高揚感を感じ始めた。それが松野の恋心、である。

一方の栄翔は出汁子と利害の一致から協力関係を結んだ。理不尽な先輩が握る弱みを握りつぶそうと立ち向かった先に起こったのは謎のオカルト現象。出汁子との仲は悪くはないものの、今は会うたびに心配事が想起されてしまう。

出汁子との出会い方が違う二人。彼女に対する認識は全く違うものである。

「お前は脳天気でいいよな」

「真剣だよオレー！」

ヘラヘラした元氣よい返答の後、一問の沈黙。今日の出会い頭から様子がおかしかったが、栄翔が本当に息が詰まっているのだと見て松野はそろりと腰を下ろす。

その松野の様子を察知してか、出汁子の話から思い出しているか、栄翔は今の自分の悩みに関わる質問を松野に投げかける。

「……そのさ。変なこと聞くけどいいか？」

「ホントどうしたんだ？ 深刻な顔してさ」

「もしも、の話。お前、自分と同じ顔の他人が急に出てきて「お前のことを知ってる」と

か「お前の力が必要」とか言われたらさ、どうする？」

「……は？」

一瞬の硬直。松野がてつきり音楽の悩みについての質問だと思い、身構えていたために起こった沈黙。その様子が気まずく、栄翔は手のひらで覆った顔を逸らす。

「ごめん。忘れろ」

「いや、いや。待って。突拍子もないコト言われたから面食らっただけだって。栄翔って関係ない話するタイプだと思ってなかったからさ」

栄翔にとっては大事な話なのかもしれない、と松野は焦りながら弁解する。その身振り手振りが栄翔のため息を生む。

「……そうかよ」

栄翔の機嫌をなだめたと見るや、腕を組んで改めて真面目に考える素振りを見せる松野。栄翔は松野に体を向き直し、返答を待つ。

「ドツペルゲンガーってやつでしょ？ オレだつたらまあ……出汁子ちゃんをどうやって振り向かせるか二人で考えるかな。あ、でも出汁子ちゃんは二人はいないしなあ……」

そして返ってきた答えを聞いてまた体をそっぽに向ける。

「聞かなきゃよかったかも」

「真面目に答えたよ、オレえ？ ていうか、お前の考えはどうなんだよ」

人差し指を栄翔の顔に向け不服を訴える松野。自らの心とは裏腹に明るい松野に一息吐いて、栄翔は意識せず左手を後頭部にやり浮かない顔で自分の答えを語る。

「……俺は断った、全部。同じ顔だろうが、困つてようが、素性の分からない相手だし。ていうか、同じ顔なんて余計に怪しいだろ？ 打ち解けることなんてできないよ」

聞きながら松野はステイックシュガーに手を伸ばし、首を傾げながらステイックシュガーの封を切る。

「なんか愚痴みたいだなあ、その言い方」

「間違っちゃいない」

ステイックシュガーが松野の紅茶に注がれていく。平常通りに見える松野の態度に、今は悩まないように努めた方が良いのだと栄翔に思い至らせる。

「ごめん、ありがとう。続きやるか」

そして自分のミルクココアを一口啜る。なにかに夢中になる以外ないと、栄翔はスマートフォンと繋がった鍵盤を叩いて音を探り始める。松野も紅茶をかき混ぜていたスプーンとスカした笑顔で栄翔に向ける。

「おう、やってくれ！」

呆れた笑みと共に、栄翔もいつもの調子で松野に指を差し返す。

「やってくれじゃねえって。お前も……!?!」

そのタイミングで栄翔は思考に音が響いている事に気がつく。

金属が周期的にしなるような音。徐々に音量は大きくなってくる。栄翔の頬に冷や汗が流れる。

「あの音……!」

怪奇の予兆か、何なのか。あの日聞いた音と同じ響鳴に、思わず栄翔は立ち上がり、周囲を見渡す。血相を抱えた栄翔の突然の行動に驚き松野の体は少し跳ねる。

「ど、どうした?」

「お、おいおい……追手が来るとか、こ、殺されるとか、アイツが言ったこと本当に……?」

松野の声を気にせず注意を凝らす栄翔の視界、先日音が響いた直後に発生した空間の裂け目は無い。発光物や不可解な現象が起こっている様子もない。

だが、音はやはり鳴り、大きくなってきている。心臓の鼓動が混じり、焦燥感を掻き立てる。無意識に挙動がせわしなく変わっていく。

「おい、栄翔!」

「!」

依然として音は聞こえる。だが、松野の声を張った呼び声に栄翔は我を取り戻す。息

を整え周りを見ると、片眼鏡の店長が恐る恐るという表情でこちらを見ていた。

「尋常じゃないぞ、今のお前」

松野は栄翔をなだめるために自らも立ち上がり、栄翔の隣に寄って肩をさする。

「あ、ああ……ごめん」

栄翔は自分がこんなに取り乱すとは思っていなかった。そんなシヨックと鳴り続ける音に苦悶の表情を浮かべながらうなだれる。

まだひと月経つかという程の付き合いではあるが、どうやら栄翔は大きな問題を孕んでいるのだと松野は察した。だがしかし、事情を探るより兎にも角にも落ち着くことが先決だと栄翔の肩をさすり続ける。

数秒の後、あらゆる音に交じって鐘の音、扉の音が店内に響いた。

「い、いらつしやいま……あら？」

店主は入口を見て声をつまらせる。そして栄翔の顔を見直す。直後、入り口からこちらに向かつてツカツカと床音が鳴る。

今の店主の反応で察した栄翔は眉間にシワが寄せた。

「……なんなんだよ、全く」

壁とショーケースの間に靡く黒い長髪、華奢な体つきだとわかる女性のシルエット。どこか落ち着いた佇まいの彼女の顔は、そこにいる誰もが見た顔だった。

「え、栄翔……!？」

空間の裂け目からの来訪者の一人、栄翔と瓜二つのパツヘルである。

「カノン、もう時間がないの」

静寂の中、二人は相対す。

2—2 三人娘の休日

巨大な金属の塔。直径十メートルはあろう八本もの円筒の柱の上部には回転するどらやき状のレーダードーム、下部にはそれぞれ塔の外側を向いたミサイル入りの鉄の箱が柱ごとに四機が連なっている。最上部には八角柱の巨大なハッチボックス。内部には無数の拠点防衛用小型無人戦闘機が収められている。

「……とは、規模が滅茶苦茶だ。流石実物は画像で見るとより圧力を感じるわね」

隣接するアドメイン連邦空軍ミヅホ諸島国駐留基地と提携し、観光資源として扱う国際空港観光施設の施設『スカイガード』。その紹介パンフレットとガラス張りの壁の先にある実物を見比べる少女の名は永野みゆき。

観光客が多い周囲と比較しどこか浮いた出で立ちの彼女。グリーンのパーカーの下に着るクリーム色のTシャツには前面に『HAPPY』という文字と笑顔のシンボルがプリントされており、両胸に生る巨大で柔らかな膨らみで直に押し広げられて苦しそうにしている。水色のジーンズと黒のリュックサックも含め、これらは彼女が好んで身につけているものである。

彼女が思考を巡らせてじっと立っていると、その背後から柔らかく通りの良い声が呼

びかける。

「みゆきち、あんなんキョーミあるん？」

同時、背後から腕を退かせて手が伸びてきた。ダークブルーとイエローのマニキュアで彩られたその両の手は、みゆきの双山を挟むようにして圧迫する。それはさながらつきたての餅の様にやわらかく、容易にその形を変えられる。

「……あの、メグ。ここ、外」

触られることには触れず、みゆきは引きつり笑いを背後に向ける。そこには薄いライムブルーの長髪を携え、青いアンダーフレームの眼鏡越しにイエローの瞳を恒星のように輝かせる少女がいた。

黒と白を貴重とし、アクセントにパープルのチエツクYシャツを腰に巻いた個性的で若々しい服装。肩出しのタートルネックに白いミニスカート、『ROCK N ROLL』という文字の絵柄のサイハイソックスにパンクなショートブーツ。そのどれにも星柄があしらわれている。

彼女の名は木野春メグ。みゆきの同年齢の友人である。

「理系につよーて頭ええのに、ノーブラで外歩くヘンタイ行動もしちゃうて。なんなん、みゆきちてアホなん、カシコなん？ どっちや、も〜！」

「ぬひっ！ メグ、やめ……」

ふやけた声を見無視し、慣れた手でみゆきの乳房をこねくり回すメグ。みゆきの肩に髪がかかると密着し、みゆきの耳元にくすぐったい声を吹きかける。

「なあ、なんでなん？ 教えてえ？」

「んふいえ……あ、合うブラがないからんだけど、ねえ？」

少し顔を赤らめつつ、メグの手を引つ剥がす仕草を控えめに見せるみゆき。見透かしているとも言いたげなニヤつきのメグは「しゃーないなあ」と両手を離し、自分の体の後ろに回す。

「ルミルミにみゆきち。おつきいおっぱいは遊びがいあつてええわあ」

「あなたもでしょう！」

同様に巨大で突出した胸を張るメグの仕草にみゆきは思わず声が大きくなる。その慌てふためく様子にきやらきやらと笑いつつ、自分の乳房をブラジャー越しにゴワゴワユサユサと動かして見せるメグ。

「自分のじゃなく」

「も……」

一通り満足し、メグは手をおろしてみゆきが見ていた搭の方に横に並んで体を向ける。弄ばれた気疲れをため息と共に吐き、みゆきも同じ方向を向いた。

メグはみゆきの眼差しをちらりと横目で覗き、ふと何気なく持っているみゆきへの疑

問を投げかける。

「みゆきち専門生物やる？　前も機械の本とか読んでたり、今日もあんなん見て。意味あるん？」

「知識に専門も非専門も無いわ。一見関係のない事が起点となつて新たな理論が生まれることだつてある。それに、仕組みがあるものには興味が尽きないから……」

みゆきは顎に手を当て、目を細めて塔を観察している。注意深く、興味深く。メグはその様子にはにかむ。

「みゆきちアンテナびびび、やなあ。ワタシはよーせんな」

自身の長いアホ毛を揺らしながら、頭上で開いた両手のひらを左右に動かすジェスチャーを取るメグ。その仕草に思わずみゆきは笑みをこぼし、返す様に胸に拳を当てて得意げなポーズを取る。

「趣味なの。考えることは私の趣味。材料はいくらあつても足りないわ」
「前も言うつたなそれ」

しかし、メグは素つ気ない。照れくさくなつてしまったみゆきは気取つた物言いを誤魔化す咳払いで話題を変える。

「そ、そういえば依瑠光は？　上級者向けのコースに招待されてたけど」

「ルミルミはへ口へ口。少し休んでからこつち来るつて。あんなんよー乗るわ」

依瑠光とは二人の共通の友人の堂本依瑠光の事である。スカイガードに二人を誘ったのは彼女だ。

この少し前、依瑠光とこの場に居る二人でアドメイン連邦空軍が実際に訓練で使用する戦闘機シミュレーターを体験できるコーナーを訪れていた。これが依瑠光の目的だ。

仮想飛行訓練を体験した三人。前面左右に設置されたモニターに投影される空はみゆきとメグに酔う様な慣れぬ感覚を与える。二人は上下方向を喪失し早々に墜落。

一方の依瑠光。操縦桿を操作して空中のリングを通る操縦訓練、映像が生み出す錯覚の重力をもともせず、空中に浮かぶリングを漏れなく通ったのだ。

「天地の区別がつかなくなるあの感覚、バーデイゴっていうんだっけ？ 依瑠光はよくあれを起こさないものよね」

「ホンマに。しかもその次やスゴイんは」

見込みがあると判断され、依瑠光はより臨場感を味わえるシミュレーターの使用を認められた。それは、戦闘機の操縦の際に発生する多方向で高負荷の重力を擬似的に再現する機能がついているが、依瑠光はそれに嬉々として挑みに行ったのだ。

「あないなごっつい機械でグワングワンシェイクされて、それでもルミルミ墜落せんかったんやで。えぐ」

筐体というには大きい、部屋と呼ぶのが相応しい最新鋭のシミュレーター。カプセル

状の搭乗部がくるくる三次元的に回転し角度を変えつつ、壁面に貼り付けられたレールを高速で周回することにより、多面的に変化する遠心力が搭乗者に臨場感を与えるというものだった。

依瑠光はそれを初搭乗にしてクリアラインを超えるスコアをあげたのだ。訓練内容はほぼ同じであるが、初挑戦でのクリアライン突破はベテランでもなければそうそう無い事だと係員も言っていた事を二人は思い出す。

「学校入る前、アクロバットヒコーキのパイロットになるためハンマー投げやる言うてたな。実ってきてるって感じやなあ」

「去年の全国大会二位は伊達じゃないわね。きつと三半規管が特別強いのだよ」

二人が彼女を褒め称える最中、元気で強い少女の声が呼びかける。

「何話しとるん？」

聞いた声に二人は振り向いた。

彼女が依瑠光だ。髪は紅梅色のふんわりとしたセミロングヘア、てっぺんにカーブしたアホ毛を一本携えている。少女らしからぬ体格の良さと大きな胸は紺のシャツ越しにもわかるほど。日焼けた顔や腕の褐色、キュロットとニーハイソックスの絶対領域から見える肌の白、そのコントラストは彼女がスポーツに励んでいることを示している。

腰を当てて堂々と佇むそんな彼女に、二人は口角を上げて答える。

「ルミルミのコト!」

「う、ウチの話い?」

「流石よね〜」

自分のことを話していると知り、依瑠光のエメラルド様の澄んだ瞳がまぶたで半分隠れる。少々照れくさそうではあるが、彼女は腕を組んで少し得意げに振る舞う。

「まあ? ちょこっつと自信あるんはあるけど?」

そう言うと、依瑠光は体にかけてポシエツトを開き、あるものを取り出した。それを二人の前に突き出し見せると、メグは真つ先に反応した。

「あ、ドーラちゃんのエンブレム!」

「そー! キーホルダー、高得点景品にもろたねん!」

依瑠光が掲げたのは空軍部隊スワロー隊のエンブレムメタルキーホルダー。中央に燕が翼を広げたシンボルが特徴である。隣接する基地の所属の中では最も操縦技術が高い部隊、メグが発したドーラという名はそのエースの名である。

「ほら、二人にも! 無理言うて人数分もろてきたんや!」

依瑠光はにっかりと笑顔で二人の手に直接キーホルダーを握らせる。余程楽しく、嬉しかったのであろう事が見て取れる依瑠光の振る舞いに、二人も釣られて笑みをこぼす。

メグはそのキーホルダーを早速と言わんばかりに手提げバッグに取り付けはしゃぐ。「ほなほな、ドーラちゃんトコはよ行こ！ ルミルミのキーホルダー自慢しよ！」

すっかり上機嫌のメグはドーラという人物との対面を急いでいる。依瑠光とメグの共通の知り合いである様子で、依瑠光もメグの誘いに遅れ無く頷いている。スカイガードに来ると基地のドーラに会いに行くのが通例となっているのだ。

一方でみゆきはそのドーラに会うことは知らされているものの、知っている素性は二人よりも乏しい。ネット上で得た情報のみでイメージしているのか、キーホルダーを眼前まで持っていく、まじまじと見つめている。

「そのドーラさんって、ニュースやアドメイン空軍のプロモーションムービーで見たけれど……背が高くてミステリアスなクール美人という感じの有名人でなんか緊張するわ」

目を細めて緊張を感じながら考えているみゆきに二人は笑いをこぼす。

「あつはは！ みゆき、だいぶフランクやでドーラさん！」

その緊張具合を面白く感じる二人。その間にはみゆきとは全く違うドーラの人物像がイメージされている。二人の憧れであり友人、それがドーラという人物である。

「へえ……映像ではあんなにクールな感じに見えるけどね」

「ああ、アレ。メディアは緊張するんやって」

「会うたらわかるわ」

ドーラの映像はすべて神妙な顔をしながら淡々と質問に答える姿のみ。しかし、二人の様子を見ると認識のズレが有ることをみゆきは理解した。

傍ら、メグはみゆきをみてニヤニヤと悪戯な顔を浮かべている。

「クールな感じに見えるて、みゆきちが言えることやないな」

「な、何よメグ。その目は」

クールだと思われがちだが、実は人見知りをこじらせているだけのみゆき。ここにいる二人にはその本性が知られているとはみゆきも身認知はしているが、しかし引き合いに出されると恥ずかしいもの。たまらず顔を赤くしながら足早に先行しようとする。

「ほ、ほら、早く行かない？ そのドーラさんが待つてるんでしよう？」

「そっち逆や、みゆき」

「えっ？ あっ、あ！」

依瑠光のツツコミに更に顔を赤くして挙動不審になるみゆき。それを見てきやりきやらと笑うメグ。

「みゆきちほんまおもしろいわ〜！」

「も、もう！ 面白がって！」

メグに詰め寄って恥ずかしさを誤魔化すようにみゆきは声を張る。顔が熱くなり汗

が顔を伝う。その様子に依瑠光は腰に手を当ててやれやれといった様子でメグを諫める。

「メグ、そのへんにしときやく。おもろいのは事実やけど、次行けんから」

「は〜い!」

「依瑠光も!」

みゆきの赤面と二人の笑い声。ここで三人の女子高生の楽しいやり取りが一旦の区切り。

……と感じた直後。スマートフォンのバイブレーションが鳴る。

「ん……………」

みゆきがスマートフォンをジーンズの左ポケットから取り出す。画面には一件のメッセージ通知。記載されているのは『MYSTIC』というアカウント名。その名を見てみゆきは顔をしかめさせる。

「どないしたん?」

自らの様子に異常を感じた依瑠光に、みゆきは不安げに眉をひそめて見せ、おずおずと口を開く。

「山本さん、から」

「うわ、アッキー?」

「あんなんと関わつとるんか」

MYSTICの正体は山本秋江という一学年上の先輩である。この秋江という女、みゆき達が通う学校内では要注意人物として警戒されている人物だ。

異様にオカルトに傾倒し、オカルトの為ならば手段を選ばず、犯罪にまで手を出しているなどという噂まで立っている。悪評尽きぬ狂った彼女と、どういう理由かみゆきは関わりを持ち連絡を取り合っている。

「いや、だって……」

みゆきは依瑠光の問いかけに言いよどむ。地面に目線を寄せ、口をとがらせながら二人から目をそらしている。分かりやすいと言わんばかりにメグと依瑠光は勘づく。

「わかった。アツキーにキョーハクとかされとんやろ」

「あのチビ、ええウワサ聞かんしな」

心配と呆れを見せる二人に言葉が詰まる。みゆきは少し申し訳無さそうに返事をす
る。

「えつと、まあ……そんな感じ」

みゆきが二人の目を見ないので依瑠光はため息を吐く。後ろめたさを感じているの
だろうと思つて、安心させるためにみゆきの肩に手を触れる。

「気にすな気にすな！ ウチら友達や、なんでも相談しい！」

「おうおう、ワタシら何でも聞いたるで〜!」

メグも依瑠光に合わせてみゆきの手を笑顔で取る。自分との精神的な繋がりを感じ取る二人の触れ合いを受ける。みゆきはありがたく、しかしもどかしいという気持ちで一杯になった。

「ありがとう……でも……」

秋江に繋がれた枷のことはまだ言いづらい。目を合わせれない。その反応に、余程の理由があるのだろうかという考えが脳裏に浮かぶ依瑠光。

「……ま、とにかく。今来とるメツセージは何やて?」

今は段階を踏むべきと判断し、まずはみゆきが手にする今の問題に目を向ける。

「み、見てみるわね」

恐る恐るにスマホ画面を開くみゆき。依瑠光とメグも画面を見守る。

数度の操作でメツセージは開く。まず目に入ったのは写真。

「……!?!」

写真に映る〈みゆきの顔〉。そこにいる彼女と同じ顔。

だが、三人誰もがそれをみゆき自身のものとは思えない。

写真の彼女はポリウムのあるツインテールを作れるほどに長い。普段裸眼であるはずなのにメガネを着用し、更には乳房の体積は見慣れたものより蓋周りも大きいと見

えるほどの大きさ。

明らかにこの場に居る（みゆき）とは乖離を感じる。双子の姉妹であるとも言い難い、異質な違和感の存在。

「なんやこれ。みゆき、なん？」

「ヘンやで、ナンカ色々。ごーせい？」

故に、これはコラージュ写真であると結論づけるが早いと依瑠光は考えた。寒気と共に友人を脅しにかける秋江への怒りが同時に湧き出てくる。

「そういうことか、みゆき。あのアホ、いつペンしばいたらなあか……」

「これ、合成じゃないわ」

しかし、怒気の混じった依瑠光の声とは真逆、みゆきの静かで強い声が割って入る。

「……なんて？」

自身の怒りとは背中合わせの声色のみゆきの声に、依瑠光の思考に困惑が割って入る。だが、それを感じ取る余裕を取らせずにみゆきは更にまくし立てる。

「合成した形跡が見られない。隣りにいる鍋塚さんはこの私に似た人の後ろに被さっているけれど、境界線に写真編集時特有の歪みやノイズやぼやけ、異常な彩度やコントラストが無い。写っている部屋との光源の位置や強さも後ろの鍋塚さんと一致していると言っている」

「待て待て待て」

「どーいうこと？」

口早に説明するみゆきの様子は普段二人が目にするものとは違う様子。戸惑い、整理が追いつかない二人に理解させるため、みゆきは顔を上げて真剣な眼差しを向けた。

「その……つまり、この人は『居る』可能性が高い」

深い思考が干渉し、眼差しに形容し難い感情を持った鋭さを帯びたみゆき。二人が言葉をつまらせるほどにみゆきの放つ空気が張り詰めたものになっている。

「んなアホな……」

少しの静寂のあと、再度秋江からのメッセージが届く。

《堂本、木野春で三名。共有の必要がある情報がある。至急三名で集まり雑貨屋M A R V E L ・ A G R I まで来い》

更に続いてもう一通のメッセージ、加えて三枚の写真だった。

《必ず来い》

それを見た三人共、顔から血の気が引いたのを感じた。

2—3 知るという事

「栄翔が急にドツベルゲンガーの話しだしたので、君が原因だったわけだ」

場所を変えた彼ら。取り乱し騒いだ気まずさと、これから空気が悪くなるであろう予感に、店の迷惑にならないようにという栄翔の思いがあつてのことである。

スガノ町第二公園には遊具があつた名残のコンクリート基礎とブランコがポツリとあるだけで、ベンチもない小さな公園。それを覆うフェンスに三人は寄りかかっている。

公園ののどかさとは温度が違う三人は静けさの中。松野が口を開く。

「しかし、なかなかぶつとびかつとびガールだね、パツヘルちゃん。施設とか飼われていたとか」

「かもしれないね。この数週間あなた達の言う〈普通〉の暮らしを見てきた。私の過ごしてきた環境はとも息苦しいものだったと実感したわ」

「……アンタとあの日がなければただのイカれた話だよ」

道中、彼女は今日訪れた目的と自らの素性について話していた。

彼女が正体不明の少女飼育施設で暮らしていた事、施設の真実を知ってしまったこ

と、捕まりそうになった所を空間転移装置で逃げてきた事。

そしてもう一つ、栄翔にその逃亡に改めて力を貸してほしいと言う事。

栄翔があの日パツヘルと出会った結節、空間の裂け目こそが空間転移装置が作り出したワープゲート。見た以上は彼女の言う事はある程度の信憑性があると認める他ないのだが、信じたくない栄翔は心が次第に波立っていくのを感じている。

「オレと同じ顔のアンタ、オレの居場所を知ってること、それからアンタの生まれの話。全部なんにも知らないんだよオレは。知らないところでオレは巻き込まれてばかりいる。高校生活始まるってとこに、ワケわかんねー事が起きまくって。刺激はたしかに欲しかったけど、これはキャパオーバーだよ」

「私は、そんなつもりじゃ」

「わかってるけど、オレの気持ちも知ってくれって話だよ。タダでさえ現実味もなくて危ないアンタの話、そうじゃなきゃ聞けないよ」

吐露する思いはこの場の空気にとつては汚濁の根源でしかなかった。お互いに悪意はなく、しかし相手にとっては深刻な障害となるすれ違い。それを是正できるほどの余裕が二人にはない。

だが、蚊帳の外になっている彼にはあつた。

「君ら、空気悪いよ。何、姉弟喧嘩？」

空気など読むまい、いやむしろ読んでいるからこそなのか、飄々とした態度で二人に絡みかけるのは松野。気の抜けた声色と姉弟の様にされていることも腹立たしく思った栄翔は、刺すつもりで松野に眼光を向ける。

「お前なあ」

「話聞く気ならカリカリしてたって仕方ないだろう」

松野はあいも変わらず余裕のある言葉を得意げな表情で投げってくる。が、その言葉に栄翔は気にする所があるので突き出した視線をそらしてしまう。

責めることが目的ではない。コミュニケーションとは気づきの多さこそ会話円満の心得なのだ。松野は知っているのだ。栄翔も松野の言いたいことは察している。

「ていうかさ、君ら自己紹介とかしたの？」

気づきの数を増やす為には互いのことを知りあうのが一番。二人は互いを知っているとと言うには程遠い事が松野にとって気がかりで仕方がない。

案の定、パツヘルは首を横に振った。

「そんな事している時間は……」

栄翔に向けられた切れ味のあるそれと同種の眼差し彼女からも受け、松野は肩をすくめて苦笑い。そして論すように語りかける。

「君も俺らの事を知らないと思うけど、君は血相抱えた俺らに「話を聞いてくれ」って言

われてさ、なんだこいつらって身構えちゃうじゃない？ 単純に怖いじゃない？」
「そんなこと……」

パツヘルは言葉を重ねることができない。

素振りは無邪気だが、話を聞いて貰うという事に対しての松野の姿勢の誠実さ。横で見ている栄翔は彼を軽薄な人間だと思っていたが、その認識の変容を感じてしまつて何か恥ずかしさまで覚えてしまう。

「松野」

照れ隠しをしたかかったのか、思わず声が出てしまう。松野はそれにウィンクで返し、フエンスから数歩歩いて手を広げてにっこりと笑つた。

「じゃ、俺からね！ 俺、松野明良。特技は歌で、趣味はカフェでお喋り。好きなもの、つていうか人は鍋塚出汁子ちゃん！ よろしくう！」

二本指をこめかみ付近で立ててスカしたポーズを繰り返す松野。二人の反応は微妙にぎこちない。その空気の中、栄翔が手をゆっくりと挙げる。

「質問。出汁子にしょっちゅう絡みに行つてるけど、手応えあんの？」

「お、いいねえ。栄翔わかつてんじゃん」

お膳立てしてくれたならば乗つてやろうという栄翔の質問に、松野は鬱陶しいそうにする栄翔の肩を嬉しそうに叩いて応える。

「まあ、その質問の答えは正直ノーだよ。「意味分らない」とか「また今度」ってあしらわれる。けど、そのツンケンしてる感じがあの子の気持ちの裏返しさ。ホントの自分のことをちゃんと見てほしい子なんだよ、きつと。そこが可愛くつてき、分かつてやりたい気持ちがあるっていうか！」

想い人の事を話す松野はいつも以上にジェスチャーが多い。栄翔は彼の話を聞いて、彼への感心を強めた。

「あー、出汗子そういうトコ確かにあると思うわ。そういうトコ見てんのつて意外だな」「好きな子の事理解しようとするのは当然！」

頬を赤らめながらも屈託のない笑顔に栄翔も釣られてかすかに笑みを浮かべる。

傍から見ていたパツヘルは不思議そうな顔をしている。やはり、焦りの色が隠せない模様だ。

「その……いまいちピンときていないのだけれど。こんな話をして何になるの？」

「終わったらわかるよ。じゃ次、栄翔な！」

優しい声色でパツヘルの焦りを隅に寄せ、栄翔を指差し番を促す松野。栄翔は一息吐いて正面を向く。

「名前は九音栄翔。松野と同じ歳の高校一年。趣味で好きな物は作曲と編曲、それから音ゲー。休みの日はだいたいそれだな。ま、普通の音楽好きの高校生だよ。普通の、ね」

「作曲ができる音ゲーの全国ランカーが普通かあ？」

「うっせ。こういうのは謙虚に言ったほうがカツコイんだよ」

それまでは緊張で手一杯だった栄翔の立ち居振る舞いが少し柔和になっている。パツヘルもそれを感じているが、その理由までは掴みきれない。

狼狽えるパツヘルに松野は優しく手を差し出した。

「ほら、パツヘルちゃんもなんか栄翔に聞きたいこと無い？」

「重いのはやめてくれよ、今は」

「あ、えっと……」

とつさに頭脳を回転させるパツヘル。そして少しの間を空けて出た言葉は。

「コウコウセイって、何？」

そして聞いた栄翔の顔は強張った。この世の常識とは別のものを基準に生きてきたからこそ出てくる質問。その上、その質問をした自分と同じ顔をした少女が作っていない無邪気な表情でいる。

彼自身も本当は腰を据えて話をするべきだと思っているからこそ、彼女からほとばしる純粹さに戸惑ってしまう。

「……重え〜」

「え、ええ!？」

頭を抱える栄翔にそんなつもりはなかったと狼狽えるパツヘル。悪意のない食い違いとこんなにも見た目が似ている二人の噛み合わない様子を見て吹き出す松野。

「あはは、おもしろー。答えてやれよ栄翔！」

松野を腹立たしそうに目を細めて見はするも、素直にパツヘルの質問に回答を与える。

「高校生っていうのは学校に通ってるってこと。学校は知ってる？」

「何かを教えたり教えられたりするイベントよね？ 施設にもそういう事をする習慣があつたわ」

「まあうん。それを週五日やってると思ってくれば良い」

「エイト、アキヨシ。あなたたち物知りなのね……いいなあ」

二人を見る。パツヘルの目は輝いていた。その眼差しに松野はある気づきを得る。

「なあなあなあ、栄翔」

「なんだ？」

耳元に語りかけるてくる松野の言葉を栄翔は静かに待つ。とてつもなく神秘的な松野の雰囲気、息を呑む。

「もしかしてさ、お前って結構可愛い？」

聞いて間髪入れず松野の肩をどついた。

「ちよ、そんな怒んなって」

「うるせえ！」

真剣な話が出てくると思いこんでいた事がバカバカしく思えてしまう松野の言葉に、栄翔達が課せられたライブ期日破りの罰ゲームが想起される。

「メイド服、案外似合うかもよ」

「おーおー、次は顔行くぞ？」

そのやり取りに場の空気が染まりつつある中、おどおどと狼狽えているパツヘルに気が付く二人。

「ふ、二人共、ケンカしちや……」

栄翔はまくった腕を、松野はふやけたふざけ面を戻してパツヘルに向き直る。

「ああ、大丈夫。ケンカじゃないケンカじゃない」

何事もなく戻る二人の仕草に胸を撫で下ろし安堵を見せる彼女。その仕草を確認した栄翔は自分の番は終わりだと認識する。

「パツヘルの番だよな」

「どう？ 要るでしょ、自己紹介」

二人が目線を合わせると、パツヘルは少し考えて首を縦に振った。

パツヘルは心中にあつた焦りが和らいでいる事を感じた。そして、それはほか二人に

も言えることだとは自然と受け入れることができた。

彼女はそれまで過ごしていた環境で、気づけば互いが互いのことを既に知っている状態で過ごしていた。知らなくともいつでも閲覧可能なデータベース上に記載されている情報で相手の事を全て円滑に知れた。互いへの理解が最初から出来上がっている関係しか知らなかったのだ。

「相手のことを知らないって、なんというか……『狭い』のね」

松野が伝えたかったニュアンスは通じ、彼女はそれに則って自身の自己紹介を始めた。

「ええと、私の名前はパツヘル。年齢はわからないけれど多分エイトと同じで、趣味は読書、特技は舞踊……これで良いかしら？」

松野は頷きつつ、栄翔とのやり取りと同じ様にパツヘルに質問を投げかける。

「舞踊って、どんな踊りを踊ってんの？」

「うーん……」

全身を使った動きを言葉で説明するのは難しい。そう考え、パツヘルは少しフェンスから離れてステップを刻み始める。やがて、彼女の口からメロディが口ずさまれると同時に動きが大きくなっていった。

ブレのない曲線を描く腕の動き、寸分の違いも無く刻まれるステップ、全身の動きと

連動し妖艶さを演出する髪の毛のなびき。素人目で見ても、彼女の踊りには情を掻き立てる魅力があった。

音楽がない状況であるにも関わらず、十五そこらの少女が出せる艶めかしさではない繊細さと表現力が溢れ出る。栄翔が思わず足でリズムを取り、松野が色を刺激され頬を紅潮させる程の完成度。それが彼女の異質さを否が応でも感じさせる。

踊り終えたパツヘルは、本来あるであろうスカートを持ち上げる仕草と同時にお辞儀をする。それに応えるという気持ち発する前に二人は拍手をしていた。だが、彼女の空気は仄暗い。

「ありがとう。私はこれを施設のステージで客に披露していたわ。本を買うための通貨と引き換えにね」

彼女のそれまでの暮らしを垣間見せる言葉と表情が二人の彼女への興味を増す。それが引き金となり、栄翔は彼女との出会い頭を思い起こした。

「質問。今日の出会い頭もそうだが、最初にオレのこと『カノン』って呼んでたよな。なんで?」

「あ、それ俺も気になってたやつ。なにに、もう一人そっくりさんがいるとか? パツヘルちゃんの知り合いにさ」

パツヘルが喫茶店に来訪した時、そして彼女との出会いの日。彼女が彼を呼ぶ際に

使った呼称の謎がずっと引っかかっていた。

その質問を聞いたパツヘルは栄翔の瞳をじっと見つめた。

「本当に、何も知らないのね。アキヨシの予想はそんなに間違ってるない」

「それ、答えじゃないよ」

和やかさを持ちかけた空気が再び重くなっていくのを感じながら、栄翔とパツヘルは見つめ合い静かに意図を伺っている。

だが、お互い少しだけ理解が進んだ。相手を端から否定する程の警戒心は解消されているからか、栄翔は何も言わないが目はそらさない。待つてくれていると察してパツヘルは言葉を発す。

「……あなたのカタログゲームよ。私、一緒に来たあの子、そして『カノン』も。あの施設が出自の人間は目的ありきの作り物か、その研究の過程で生まれた実験体」

「カタログ？ 売り物として人を作ってるって？ オレもその一人だって言うのか？」

出てくる言葉は全てが現実と乖離している。SF物語の設定を語られているような感覚からか、やはりどうしても飲み込みきれない。

そして、どうやらパツヘルも栄翔と松野二人の気持ちがわかるという様子で、浮かない顔つきをしていた。

「私はあなたなら何か知っているのではないかと思つてた。入手したカタログから読み

取った情報の補完でしか話せないの、私も」

「オレの力が必要ってそういうことか」

パツヘルは頷いた。だが、完全な肯定とまではいかず付け加える。

「それから……私は、あなたと私との間に大きなエネルギーの存在を感じているわ。追手を巻くには使えると思ってる」

栄翔には心当たりがあつた。

「ざっきの音、関係しているんだな」

喫茶店で栄翔にだけ聞こえていた金属がしなるような怪音の事だ。

「多分、その音の事。あなたを探したいと思つたら音が聞こえて、音に従って進んだらあなたに会えた。あの日も聞こえていた。これは偶然ではないわ。カタログにだつて『パツヘル』『カノン』は見開きで隣り合わせに掲載されていた。私達には何かしらの繋がりがあつたのよ」

確信のこもつたパツヘルは前のめりになっていく。栄翔は一步も引くこと無くパツヘルの目を見続ける、強い意志を示すために言葉を頭の中で組み立てながら。

「……わかることはできるけど、わかりたくないよ。オレが作られただなんて信じたくない。親もいるし生きてるし、思い出だつてちゃんとある。じゃあ親はオレの何なんだつてなるじゃないか。親は偽物だとしても言うのか？」

「それは、えっと……」

栄翔の言葉と目つきはパツヘルに鋭く深く訴えかけてきた。彼女はそれに答えられずにいる。嘘を考えているというよりかは言葉を選ぶ、言うことをためらう様な、後ろめたい事を内に抱えているのだと、目を逸らして一步引いてしまう仕草から察せられる。

この話にこれ以上の進展はないだろうと松野は思つて聞いていた。なので、彼は助け舟を出してやらなければと一息吐いて笑顔を作り、咳払いで二人の注意を自分に向ける。

「置いてけぼりにしないでくれよ。せめて二人で話してる間、そのカタログとか見たいんだけど持っていないの？」

この話のキーアイテムであろうカタログは存在を確認できていない。おどけた仕草でとぼけてはいるが、松野はこの有無で二人間に進展が起ると考えて話を聞いていた。

だが、パツヘルは申し訳無さそうに頭を垂れた。

「ごめんなさい。あれはアキエたちに預けているから……」

「あつてもなくても同じだよ。オレは九音栄翔。『カノン』じゃない」

そして栄翔にとってカタログの有無は関係なかった。自己の存在の決壊に繋がりが

ねない物など見たくないと、彼の拒絶心は拭いきれない。

栄翔の意思を聞いてパツヘルは何も言い返せない。いくら思考を泳いでも、彼を納得させる言葉は見つからずに口を紡いでしまう。等身大の少女の様に見え、そして自分と同じ顔であるから、栄翔はその姿を視界に入れてしまうと胸に穴を空けられるような感覚を覚えた。

だから、彼は息を深く吸って空を見上げた。何も無い公園に、空を遮るものなど無かった。

「……つたく、なんなんだってなあお互いさ！　ちよつと息抜きしない？」

「エシカウニアケテシ。カカセニアヒヒヒスリ」

2—4 矛先は揃わず

普段よりも荒ぶりを帯びた鈴の音が、MARVEL・AGRIの門戸が開いた事を告げる。魔術師然とした黒い衣服を来た黒メッシュの金髪女性店主が顔を向けると三人の来店者。先頭は常連客の占い師の娘で顔見知りであった。

「山本秋江いう女に呼ばれてんねんけど、店長さん知つとる？」

その彼女、依瑠光の形相はただならぬ怒気を帯びている。店主は臆することもなく、普段どおりの態度で彼女の問いかけに応える。

「ええ。でも、扉はゆっくり開けてくださいね依瑠光ちゃん」

「次気いつける。奥、邪魔するで」

明らかに頭に血が上っている依瑠光は店主の注意を飲み込まずに、ドスドスと床を踏み鳴らしながら店内最奥の扉を叩くようにして開いた。

店の裏方に入って真つ先に視界に入り込んできたのは、こちらを背にして座っている華奢な背中。そこから垂れる黒く長い尾のような縛った後ろ髪。

「呑気に座つとんちやうぞチビィ！」

依瑠光の怒鳴りに対し悠々と立ち上がり振り向いた禍根の主、山本秋江は依瑠光に胸

ぐらを掴まれ、そして顔色一つ変えずに腕を掴み返す。だが投擲種目の選手である依瑠光の腕に歯が立つわけもない。

秋江にとっては危機的な状況、にも関わらず彼女はほくそ笑んで見せた。

「予想より早いな」

当然、依瑠光は激昂した。煮えたぎる血液の赴くままに放たれた平手打ちは、秋江の顔面にブレなくぶつかった。

床に転がり顔面を抑えた秋江を、再度胸ぐらをつかむようにして無理やり起こす。先ほどまで秋江が身に付けていた眼鏡は依瑠光の足元に転がり、秋江の顔面には鼻血が滴っている。

それを見ても、依瑠光は彼女に哀れみなど感じなかった。

「あの写真なんや。はよ言えや」

先程は平手だった右手は今は拳に変わっている。この数秒の突発的な爆発に後ろで絶句していたみゆきとメグは、それを察して二人がかりで抑えにかかる。

「ルミルミ！　ちよいやりすぎや！」

「あなたのパンチはダメよ！　死なせてしまうから！」

彼女がそれほどまでに怒る理由。それがみゆきのスマホに送られてきた三枚の写真だった。

「ウチの、ウチらのあないな写真隠し撮って何するつもりじゃ、殺したるカスう！」

それは三人が色欲を一人で慰める時間、少女達の秘密中の秘密が収められたスキヤンダル写真。

丁寧三者三様に用意されたそのような物が世間に出回ってしまったては学生生活はおろか、この先の人生にも響く可能性は大いにある。依瑠光の怒りは当然のものであり、メグとみゆきも依瑠光と同じく強烈な憤りと羞恥を感じていた。

だが、依瑠光の口より手が先に出る性格により、二人は幾分かの冷静さを取り戻していた。その二人に組み付かれて落ち着きを分けて貰ったのか、依瑠光は秋江の胸ぐらを離す。

そうして解放された秋江は鼻血を手首で拭うと、腫れてきた頬を抑えながら三人に言った。

「これ、はっ！ お前達の、問題、だっ……痛あ」

それを聞いて依瑠光の熱は再上昇。メグとみゆきは再度必死に取り押さえる。

「おどれが作った問題やろがボケエ！ もっぺんどついたらなあかんかあ！」

身勝手極まりない秋江の態度に煮えたぎり続ける依瑠光の怒号はけたたましく、部屋の外にも漏れいている。休憩所兼事務所の今の部屋と直接階段で繋がっている二階の倉庫にもそれは届いており、騒ぎを察知してどたどたと数名の少女が降りてきた。

「ちよつと、会長！　また面倒事ですか！」

一人は白髪赤目の恰幅のいい少女の鍋塚出汁子。秋江が起こしたと容易に想像できるその状況に、呆れたような焦っているような顔でツインテールを揺らして秋江の元に駆け寄りハンカチを差し出した。それを秋江は遠慮もなく流れてくる鼻血をせき止めるために押し当てる。

「何々、どうしたの!？」

「レイナ、ほつとこ。どうせあのメガネが悪い」

金髪のしなやかなポニーテールを揺らす、スポーティな従業員のレイナ。緑髪の大人びたオーラを醸すパンクな幼女キリも従業員だ。荷出しの作業をしていたところに物音を聞きつけてこの二人もやってきた。

そしてもう一人。

「……………」

その姿を見た依瑠光の血相はみるみる引いていく。彼女を取り押さえていた二人も、制止に力みがいらなくなった事で気がつく。

「ホンマに、おる」

「みゆきちや」

見知った顔。眼鏡をかけていようが見まごうことのない友の顔。そしてみゆきに

とつては自分と同じ顔。目線の高さまで違わず、意識する事もなく目があつた。

「あなたがみゆきちちゃん、なんだね」

「こんにちは。もう一人の私」

二人は合わせた目に気まずさを感じることはなかった。そして依瑠光やメグより驚くこともなかった。そんな二人の空気が爆発的なまでに火照つた空気を冷め、静けさがその場を支配した。

向かい合つた二卓の長机を囲い、七名の人物が狭せまと座つている。店内とは違つて、ロッカーや書類棚、掃除用具や業務用のデスクトップパソコンなどがあるただの事務所の中、ピリつく空気を放つているのもその七名だ。

そのうち一人は先程まで輪にいなかったMARVEL・AGLIの店主、レイナとキリと代わるようにして話を聞きに来たアグリである。素性不明年齢不明本名不明、サブカル雑貨屋の店主こそ天職であると言わんばかりの胡散臭さを放つている。

「ていうか店主さんなんでおんねん。仕事ほつたらかしてええん？」

メグが両手で頬杖をついた姿勢のままツツコミを入れる。アグリは苛つくこともなく笑みを浮かべてサラリと返す。

「レイナとキリに任せました。面白そうだから見とこうかと思ひまして。それに、また

暴れられてはたまりませんから」

「や、その、ごめんな店主さん。またオカンと一緒にいつばい買いモンしに来るから！」
本当に申し訳ないという様子を、両手を合わせながら頭を下げる仕草で見せる依瑠光。アグリはそんな彼女に恍惚の表情を垣間見せた。彼女は思春期の年頃が困る様を見るのが趣味なのだ。

隣りにいる秋江はアグリのことと身をもって知っている。故に、鼻で笑って悪態をつく。

「悪趣味な」

「あら、秋江ちゃんも大概キツイのを持っていると思いますよ。だって、その左む——」
すかさずアグリを肘で小突き口を塞がせる秋江はさらに半目で睨む。それを面白がるようにアグリは口元に手を当てて笑みを含んでいるポーズを取った。

「仲良くする必要ないけれど、話し合いするんだったら落ち着きましようよ皆さん」

それぞれが重い空気を纏いヒリつく緊張状態にうんざりという顔で、出汁子は机に盛りられたお茶菓子を同じく並べられた紅茶と一緒に食べている。ふわふわのスフレでストレスを誤魔化すがごとくである。

そして、この話し合いの中心人物。永野みゆきと永野みゆきは中心で向かい合う様にして座っている。まだ言葉を交わさず、二人して黙っていた。

「……………」

みゆきが見つめているもう一人のみゆきは目を逸らして緊張の素振りを見せている。先に口を開いたのは見つめる方のみゆきだ。

「えっと、その」

「ひゃ、ひゃい？」

挙動不審になっている自分の生き写しを客観的に見ていると、みゆきは妙に冷静になった。普段の自分を見ている気持ちにもなりつつ、おずおずと視線を合わせる相手に普段出さない優しい声色で寄り添う。

「ずっと『もう一人の私』なんて言うのも不便でしょう。名前、あるなら教えて貰えると助かるわ」

「あ、うん。わ、私はルーナ、だよ」

ルーナの名前を聞いてみゆきは頷き、そのまま視線はルーナの顔から数十センチほど下に行った。数拍ほど動きを止め、再度口を開く。

「ルーナ。その、はじめましてで悪いんだけど……」

「な、なに？」

「あなたのその胸、サイズいくつなの？」

その質問と同時、誰もがみゆきの方を向いた。その視線がみゆきの心臓の落ち着きを

無くし、爆裂な加速で拍動し始めた。

「いや、ほら、だつて！ わ、私より遙かに、しかもここにいる誰よりも、しかも私のママよりも大きいつて！ きき、気になるでしょう！」

必死の弁明が依瑠光とメグの頭を抱えさせる。垣間見えるみゆきの摩訶不思議な思考回路は普通の常識では推し量れない部分が多分にある。実は色欲と好奇心が常識離れしている事に起因しているということは、二人も察しているところである。

「そらみゆきはそーかもしれないけど、聞く空気い？」

「みゆきちほんまムツツリ〜」

その騒ぎの中、存在が常識離れした彼女の上ずった声が疑問を投げかける。

「えつとね、大きさはわからないんだけど、私のおっぱい触ったらみんな喜んでくれるんだ」

「いや、なに言うとなん」

「いい、今のは彼女よ！」

「ああく！ 紛らわしやあ！」

ルーナの声はもちろんみゆきの声と同じである。混迷は深まり、依瑠光は更に頭を抱えざるを得ない。

「無邪気かるなきち」

「るなきち？ 私ハルーナだよ？」

誰にでもあだ名を付けて呼ぶメグだが、ルーナには名前を間違えられていると捉えている様子。

そんな和やかなやりとりに、大きな打撃音が割り込む。

「これだからお喋りどもは。話を戻せお前達」

机を叩いた音で意識を修正させるのは秋江だ。そのどこか取り仕切るような振る舞いに、依瑠光とメグは納得がいかない。

「えらそーに」

「机叩きたいんはウチらの方じゃボケ」

「お前は私の顔を叩いたろう。手段は選んでいられないほど深刻な事態なのだ」
「あ？」

「カードが集まりきれば、お前たちも先週中に引き込むつもりだったのだがな」
依瑠光の威圧も意に介さず、秋江は彼女のまっすぐ目を見据えて言い返す。

「ルーナと永野の様に、お前たちのクローンも存在する」

「……は？」

ルーナの存在だけでもまだ飲み込みきれていない中の秋江の発言に、依瑠光の表情は困惑の色を濃くさせる。

「証拠ならある」

秋江が差し出したのは分厚い一冊の冊子。持ち出し厳禁とマジックで書かれたのみで、紙そのままの白の表紙。何度もめくられた跡や手垢の汚れ、ボールペンでメモが記された付箋が貼られているなど、経年の形跡が見られる。唯一背表紙に刻まれた文字をみゆきが声を震わせて呟いた。

「複写人材販売カタログ」

みゆきはその本を手にとった。衝動的にその手がページをめくる。その中身はクローンの人身売買カタログであった。

冊子の前半には男性、後半には女性と分けられていて、女性のページが七割を占めている。見開きで商品見本として裸体や部位の写真とともに、細やかなスペック表記が記載されている。横から覗く依瑠光やメグが酷い表情で赤面する様な、規制の入っていない赤裸々な情報だ。

そして、みゆきと同じ姿をした女性の姿が写っているページに辿り着く。ルーナとは違い、完全にみゆきと同じ姿かたちをした写真だ。部位の写真にもみゆきは見覚えがありすぎるほどで、絶句している。

「……遺伝子操作のお手の物。カスタマイズオプションってそういうことね」

紙面の項目とルーナの恵まれすぎる程の体を見比べ、察する点が一つ増えたと表情を

険しくするみゆきは更にページをめくる。次には依瑠光の、その次にはメグのページもあった。三人のページ全てに、新商品であると示すNEWというアイコンが目立って置かれている。

二人の顔は青ざめていく。メグはこみ上げる吐き気を必死に飲み込もうと、口元を抑えて顔色を悪くしている。依瑠光は先程までの勢いをすべて失い意気消沈という様子。みゆきだけが無言でページをめくり続ける。

「キモいキモいキモい」

「……タチ悪。なんじゃコレ」

ページをめくると知った顔が次々と。同級生、部活の先輩、有名なOB。父親や母親まで掲載されている。もちろんとばかりにその中には秋江のページもあった。

「山本さんも、巻き込まれている側」

「このカタログに掲載されているのは、私達の通う有智学園の生徒とその関係者のクローン中心だ。今年の新入生はまだ反映されていないのか、出汁子のもは無いようだな」

「けれど、最後のページに一人私の同級生がいるんです」

出汁子の言葉に促され、みゆきは飛ばし飛ばしで最後のページに辿り着く。

「モデルカノンとモデルパツヘルとあるだろう。カノンの方はお前たちの知っている九

音楽翔、そしてこのパツヘルの方がルーナと一緒に来ている」

「キユーちゃんも、とか。マジキシヨ……うぶ」

「メグ、あんま無理すな」

九音楽翔は今年の入学生であり、メグが部長を務める軽音楽部の一員である。新入生は掲載されていないはずなのに、彼だけが何故か掲載されている。

「この二人で一組に売られている点、最後のページで見開き六ページで紹介されている点、ヤツは特例の可能性が高いだろう」

秋江は自分なりに考えた結論を述べ、同時にみゆきはあらかじめ中身を確認できたとかタログを閉じる。眉間に皺を寄せて無地の表紙を見つめている。ざわめいていたはずのみゆきの心は妙に静まり、しかしゆっくりと温度を上げていく。

沈黙が合図となって、秋江はみゆきら三人に改めて突きつける。

「世間に知れるの絶対に避けたい事案のはず。故に私達は狙われる立場にある」

「ケーサツに頼めばエエやんか。アホなん？」

「一番相談できない。闇社会の組織というものは、大きくなればなるほど治安維持機関にも深く根を張らせているものだ」

言い返すメグの言葉にも理由をつけて跳ね除ける。秋江の声に焦りがわずかに滲んでいると気づいたのは出汁子だ。

「回りくどいしあくどいし、面倒くさいですよね会長って」

「普通の手段で私が入を集められると思うのか？」

「まあそうですね」

馬鹿にされるような言葉の数々に向き合うだけで胸焼けを起こしそうになる。当然に舌打ちが出る依瑠光。

「どうせーつちゆうねん。乗り込んで自分らでどうにかするつちゆうんやないやろな？」

「そうだ。場所を探すにも、潰す戦力を作るにも、兎にも角にも人手がいる」

「しかもまだ何もできとらんのかい。話にならんわ」

苛立ちのまま依瑠光は立ち上がり、みゆきの後ろを横切ってメグの方に行く。メグもそれに合わせて立ち上がり、スマートフォンを起動させた。

「ドローさんは？」

「もうすぐそこ。エーミンも連れてくるって」

この場に来る途中、メグは駐留軍のドローにメッセージを送っていた。自身が事件に巻き込まれ、そのために今日はいに行けないことを伝えた。事件解決の仲介人として自身も駆けつけると返信が来たのはちょうどこのテーブルを囲む直前のことであった。

メグは秋江にアドマイン語で送られたメッセージを見せ、勝ち誇るようにスマホを揺

らした。

「アツキー、ざんね〜ん」

「駐留軍の広告塔……ドーラ・ウエツジショットが、お前たちと？」

秋江もドーラのことは知っていた。だが、露骨に嫌な顔を見せた。メグと依留光に駐留軍のエースとの繋がりがあることに対しての嫌悪だった。

そこに嬉々とした反応を見せたのはアグリだ。ニヤげづらを隠そうともしないあたり、秋江の困る顔に愉悦を感じているのは明らかである。

「あらら。あなた達そんなすごい人とお友達だなんて、人脈あるのね〜。秋江ちゃんは御破算ね〜」

秋江は舌打ちで返す。その反応にメグも鼻を鳴らし、秋江に顔を寄せて勝ち誇る悪い笑みをぶつけた。

「アツキーみたいなアカンヤツに絡まれたら頼りになる人や。脅迫に使った写真もドーラちゃんとエーミン立ち会いで消してもらおうで」

「ウチらは何も聞かんかった。アンタらは写真を消してウチらを脅迫する方法もなくなる。それでしまいや」

依留光は凄みをつけて秋江を睨んだ。メグもみゆきの肩に手をおいて、変えることを促す。

「待って」

そして、彼女ははっきりと声を出した。

「みゆきちち？」

自身の言葉に戸惑う二人の視線に、まっすぐ向き合い続けた。

「……ごめんなさい。私は山本さんを手伝う」

二人は目を見開き、眉をひそめた。ここまでの自分たちの話の流れなら、みゆきも乗ってくれるものだと思っていた。

「何言うて……」

「許してはいけないわ、こんな事」

メグは声を張ってみゆきの気持ちをごちらに引き戻そうとするが、スカイガードでもその片鱗を見せていたみゆきの怒気に言葉が引っ込んでしまう。

みゆきは捲し立てるように言葉を連ねていく。彼女の内側にある怒りをそのまま吐き出す様に。

「私は部活で遺伝学を研究している。この事態の重大さがどうしても許せない。こんな命を踏みにじるような……ここまで高い技術を擁しながら、クローンをただの奴隷としか見ていないその組織が許せない。クローンとは共存していくべきなのに、こんな……」

うつむき気味に発せられるその迫力に、二人は言い返せない。みゆきの怒りを片鱗ではなく直に感じて、さらには自分たちへの怒りでは無い事もあり、言い返せない。

姦しい怒声から一転し、沈黙がこの場を支配する中。みゆきは熱のこもった鋭い視線をルーナに向けた。

「え、え？」

そして、戸惑う彼女に手を差し出し、宣言した。

「ルーナ、協力させて欲しい。どれだけ力になれるかはわからないけれど」

「う、うん。うん、みゆきちちゃん……！」

ルーナはその手を取った。戸惑いながらも喜び、みゆきの凄みに怯えながらも安堵を感じた。この人なら大丈夫だろうと、そう感じさせられた。依瑠光とメグは啞然とした顔で、その様子をただ黙って見ていた。

その数秒後。扉の向こう、店先で喧騒が聞こえる。

メグはスマホを確認する。

「ドーラさん来たって？」

「いや、まだや」

ドーラからの到着の連絡はメグのスマートフォンに入っていない。

「今度は何やらかしたんですか、会長」

「私は知らん。迷惑者の客……いや、さて」

秋江の頬に冷や汗が流れる。何かを思い出したかのように立ち上がり、彼女は事務所のロッカーの方に駆け出した。

「くそっ、ありえる！」

間もなくドアが蹴破られる。その衝撃音とともに一同が向けた目線の中に、片耳にインカムをつけた、白いYシャツの背の低い青髪の男が立っていた。

「……デールの！」

アグリが余裕の表情を緊張へと変貌させた瞬間、男は立ち上がろうとしているみゆきに右拳を突きつけた。

「エシカウニヘツヒタウシ。ホナタウニメケソシネウカカハンノヒセニヘニアソナタチリ」

判別不能の言語を男が発すると同時に、みゆきの左胸と左手と下腹部が、引きちぎられ弾け飛ぶ音を鳴らした。

2—5 調律

音ゲーマーに於いては馴染みのゲームセンター、SANGOステーションスガノ一号店に、栄翔達は再び訪れていた。

彼らはこの出会いの地を懐かしみに来たわけではなく、かといって自分たちの境遇の手掛かりを探しに来たわけでもない。ゲームセンターにやって来るおおよその人々と同じ目的を持ってやってきた。

三人は今、ステップでリズムを刻む人気筐体である『ASHIDORI REVOLUTION』こと『アシレボ』の前に向かって立っている。

「この筐体、知ってる?」

「施設にあつたわ。ちよつと形は違うけれど……」

広く配置された丸いボタンや大きなタッチパネルに表示されるマークなどを音楽に合わせて触れていく、所謂リズムゲームや音ゲーと呼ばれる類のものをプレイしてきた彼ら。

「自慢じゃないけど、オレに着いて来るって結構やつてるな、アンタ」

「どうも。でも、さつきからゲームをしている事に何の意味が?」

「息抜き」

二人の戦績は五分五分。瞬発的な手指の動きが優れる栄翔、広い視野で大きな筐体でも無難にこなせるパツヘル。全国のランカーに匹敵するレベルの『双子の兄妹』対戦を見たいと、知らずのうちにギャラリーが発生している程だ。

その二人の対戦前の囁ませ犬、松野はギャラリーに混じって疲労の色を浮かべている。

「音ゲー天下取れるよなあ、あの二人」

衆目の中リングに上がったボクサーが相手と向き合い放つ様な闘気、それを栄翔とパツヘルは向き合つて放つ。栄翔は一つ息を吐くと、パツヘルを挑発するかの様に腕を組んだ。

「意味がほしいんなら、作ればいい」

「どういう……」

「パツヘルが勝つたらオレは協力する。オレが勝つたらパツヘルは諦める」

栄翔が放つた言葉に、パツヘルは目を見開く。

「エイト、それって」

栄翔は眼差しをパツヘルに返した。

逃げるのが嫌いであつた。それなのに向き合うのが怖くて、誤魔化したくなる事由

が目の前にいる。そんな自分の感情と向き合うためもあるのか、栄翔は言葉を続かせる。

「信じなきゃと思うほどホントっぽくて、信じれないくらいウソっぽいアンタのこと、協力する『納得』が欲しいんだ。パツヘルとの勝負なら、勝つても負けても文句無い」

パツヘルは必要とする側。される側ではない以上、相手の納得がなんとしても必要である。そのための条件がやつと現れたが、不確実にコインの裏表を賭ける様なものである。

「わ、私は」

迷いを含み狼狽していると、ギャラリーから松野が戻って彼女の肩を叩いた。

「パツヘルちゃん、コイツめんどくさいやつなんだよ。ボコボコにして言うこと聞かせてやったらいいって」

「なんだよ面倒くさいって」

「回りくどいけど、栄翔だって君のこと手伝いたいって言ってるんだしさ」

肩を組む松野。組まれた栄翔も鬱陶しそうではあるが、拒みはしない。

パツヘルの気持ちに関係なく、栄翔の立場と二人が持たせる理屈の二つに、パツヘルに同意を示させる。

「……そう、ね。勝てば、良いんだ」

頷いた彼女に栄翔はメダルゲームのコインを投げた。パツヘルはとっさにそれを掴み取る。

「な、何?」

あつげに取られるパツヘルに、栄翔は説明を始める。

「習わしがあるんだ。真剣勝負にはお互いのコインを交換する。負けた方はコインを返し、勝った方はそのコインを勝利の証としてそのコインを所持する。アンタはコインを持つていないから、そのコインでその習わしをする」

「そういうの好きだよな、ここの人たちって」

「ギャラリーの前じゃ少しは場を盛り上げる演出も必要だろう?」

栄翔は手を軽く広げて、冗談めかした笑みを浮かべた。それを受けて松野は楽しげに、軽く栄翔の背中を二回叩いた。

「はは、エンターテイナーだな!」

栄翔はパツヘルにコインを右手で突き出した。パツヘルもつばを飲み、促されるままに同じく右手でコインを突き出す。

「負けない」

「恨みっこ無しだ。いいな?」

双方左手でコインを受け取り、ギャラリーの拍手が響く。互いの瞳に宿る闘志の輝き

に、栄翔は口角を上げ、パツヘルは眉間に皺を寄せた。
(「なんで、イイと思つてんだらうな、オレ」)

栄翔がクレジツトを筐体に飲み込ませる、この瞬間感じた確かにある高揚感。それは、この先の命運を決する緊張感、自分と張り合える相手、それらが揃っているスリル。最高の勝利へのスパイスである。

だからこそ、真剣に楽しむことができるのであろう。

「三曲勝負!」

「!」

アシレボは二人がここまでプレイしてきた筐体とジャンルこそ同じ音ゲーではあるが、足を使うそれらとはプレイ感覚が大きく変わるものである。であるはずなのに、はずなのに、二人はリズムを取り逃がさない。

二人のプレイスタイルには大きな違いがあり、それぞれの得意分野で牙を剥く。腰の両側にある手すりを支えに脚のみを素早く踏みつける栄翔はハイテンポで変調がある曲を、ダンスをするかのようにステップするパツヘルはリズムカルで変拍子の曲を、それぞれ一曲ずつ勝ち取った。

「……?」

「……!」

その最中、呼吸が合つていく事を感じた。それは、勝負の最中に意気投合していく心の高ぶりではなく、思考が同期しお互いを感じる事ができる、その様な感覚であった。息を切らし、感覚の違和にも戸惑いを覚えながらも二人は勝負を続ける。公正を期すため、残る一曲はランダムで選曲することに。

選択されたのはアシレボ難関の最新曲『H i x H i || B R A V E』。ハイテンポハイテンションの楽曲を制する勇氣はあるか、という広告の文言で音ゲーマーの間で話題になつている変拍子の曲だ。二人共がよく知らない曲であつた。

曲目開始の待機画面もすぐ終わる。言葉を交わす間もなく、前奏に合わせて二人はステップを取り始める。

そして、メロディがノリ始めて足取りが始まる。曲が進むに連れて、だんだんと二人のプレイスタイルに変化があつた。ギャラリーも松野もそれに気がつく。

(栄翔、手すり掴んでない。パツヘルちゃんもダンスっぽい動きじゃなくなつてる。ていうか……)

二人の動きは段々と同期していく。

互いにその感覚に気がついていった。呼吸が、思考が、体に流れる電気信号が、自分のものであり自分のものではないみたいに動作している。お互いのエゴが重なって行き、波が増幅するかのような感覚。

同時に、栄翔もパツヘルも、金属がしなるような音を感じていた。

(あの音も、この感覚も……!)

(何……この感じ?)

しかし曲は止まらない。真剣勝負である以上、足取りを止める訳にはいかない。あと少しで決着がつく。

最終盤の発狂ゾーン、特にステップを早く踏む事を要求される時間に入る。お数多の音ゲーマーを苦しめる気の狂ったステップが二人に立ちはだかる。

ここでギャラリーからどよめき声が湧いた。

「おいおいおいおい」

「あの双子、完全に動きがおんなじじゃない?」

慌ててスマートフォンで動画を撮りだす人もいた。それほどにまで、異常なまでに二人の動きはシンクロしていた。

鳴り止まないしなり音、不可解な同期感覚。それに戸惑いながらも体は勝手に動きつづけ、発狂ゾーンを越え、間もなく曲が終了する。

二人して同じ姿勢で画面を見る、周囲のどよめきを背にして。

「パーフェクトだ……」

「あの曲を、二人してパーフェクト?」

「しかもおい、スコアまで同じ?」

『DRAW』の文字。通常のプレイではまず見ることはないリザルト画面。

「……………」

数拍画面を見たあと、お互いに顔を見合わせる栄翔とパツヘル。双方、表情から互いの体や思考に何が起こっていたかを察した。

「エイト、これが私と貴方との……………」

「…………勝ちとか負けとか、そんなんじゃないな、これじゃ」

今でも頭に鳴り響くその音を意識して、栄翔は前頭部を抑えパツヘルから目を逸らす。

自分が何者なのか更にわからなくなってきた。それでいて、パツヘルとの関係性を殊更強く感じる材料も増えた。

これでは目を逸らす事など出来はしない。

「オレ、決め……………」

決意を言葉として出力しようとした時、鈍く轟音が鳴る。数拍してアシレボのデイスプレイに何かがつつかった音だとわかり、その場にいる全員がそちらを見た。

人だ。後頭部が極端に窪んだ大の男の頭が埋まって、デイスプレイにヒビが入っている。すでに事切れているのか、手足はだらりとしている。

「キャハハハハ！」

甲高い笑い声とともに鈍い音。ギャラリーが散開し、一勢にいなくなつた。松野はその動きに合わせて栄翔とパツヘルに駆け寄る。

三人以外がいなくなつた跡には血みどろになつた男が一人横たわっている。そして一四〇cm弱、身長に似合わぬ爆乳、青髪ポニーテールの女が立っていた。

「ゲームなんかしてる場合い？ カノンとかパツヘルとかいうのオ！」

女の佇まいが栄翔とパツヘルに否応なく気づかせる。

「まさか」

「追っ手……！」

「ゴ明察！」

女は着ているYシャツを勢いよく脱ぎ捨て上裸になり、鍛え上げられた肉体を晒した。興奮状態によつて代謝が上がつて体温が上昇しているのか、その肌には汗が滴っている。

女がこちらに近寄ってくる。その異質な光景に手汗が吹き出す。血走つた目線に背筋が凍る。向けられた最高潮の笑みに喉が詰まる。

「逃げろっ！」

恐怖を掻き消すようにただ一言。栄翔は叫んだ。

2—6 侵された躰

のぞき窓から差し込むLED照明、それが満たされた薄青色の液体の中に浮く彼女の体を照らしている唯一の光源であった。聞こえる音も、液体を循環させるポンプの駆動音以外にはない。

どれくらいの間が経ったのか。鉄棺型水槽内で再び意識を取り戻したみゆきにとってのその時間は、ほんの数秒間のめまいでしかなかった。友人と過ごした休日、巻き込まれたトラブル、もう一人の自分、そして体に走った衝撃。これら先程までの記憶は存在するのに、夢であったかの様に錯覚してしまう。

取り戻した意識を覚醒させ、彼女は瞼を開いた。目に、肺に、体内に液体が隙間なく充填されていると感じるが、彼女の感覚に痛みも窒息感もない。むしろ、やけに馴染むような感覚があった。

その違和感の中、彼女は自身の体が確かにあるという感触を確かめた。力が入りづら
いが右手を握ったり、足を動かしたりもできる。液体が人肌近く若干粘度があること
も、腕を動かした際の触覚で分かる。

だが。

(無い)

心音が聞こえない。利き腕の感覚がない。腹部にある肉の存在を感じられない。意識が絶たれる直前に強い衝撃と痛覚を感じた箇所なのに、空虚であるかの如く痛みがない。

それなのに血が通い、肉体が生きているという感覚は確かにある。

(何が、私に)

鈍かった感覚がゆつくりと正常化していく中で、自分の体に触れる存在を感じた——認識した瞬間、触れるという表現も適切ではないと気がついた。

何かが自分の体から『生えて』いる。それも、顔面を除く体の穴という穴から。感覚がないと思っていた左胸、左腕、腹部にもそれが蠢いている。

感覚が戻るほどに理解が進む自身に起きた出来事、それを認識するのが怖い。しかし、元来の好奇心の強さ、不安の解消には物事の認識が必要という生来のロジックのもと、彼女はそれを確認せざるを得ない。

ゆつくりと、自らの肉体を視界に入れた。自分が生まれたままの姿でいる事を、大きな乳房が視界に入ったことで認識した。

(……私は、エログロ創作の世界に転生したとでも言うの?)

自分の体は見慣れたものではなかった。蛇と蚯蚓を混ぜたような、と言う事も正しい

表現ではないかもしれない。先端には蕾や花の様な形状も確認されるその様な異形の生物が、体にある穴と傷口から無数に生えている。絡みもつれ合い塊となって体の代わりに詰まっている。

彼女は幾許か動揺を感じたが、しかし場違いなまでに冷静な自分を感じていた。自分の中に生まれた感情が恐怖ではない事に気が付いているからだ。

この現状で彼女の中に生まれた感情は怒りであった。自らの生き写しであるルーナの顔を始めてみたときと同じ心の模様を感じ取っていた。

(傷口の境界線、触手と私の体との癒着がある。おそらく心臓もこの触手が機能を代替している。内臓も同様か。私の体が拒絶反応もなく平然と生命活動を営んでいる所を見ると、生体的に適合率が高い……)

遺伝的にこの生物は自身と近いということ、彼女は自身の遺伝学の知識から培われた感覚で即座に見抜く。それが更に彼女の鋭い怒りを増長させる。

(いつ、どこで、誰が私の遺伝子を……)

触手の事、カタログの事、ルーナの事。倫理に反した遺伝子の無断濫用、これがみゆきの怒りの根本にあるものであった。彼女自身の置かれるこの状況が、更にその怒りに拍車をかけている。

不安や恐怖をかき消すほどの怒りの最中、低めの位置から外壁を叩くノック音が聞こ

える。

(誰かがいる?)

問い返そうにも器官に液体が満たされ声が出せない。ならばと壁面を蹴って音を鳴らしてやろうかと思つた矢先、全身に振動を感じた。液体が揺れ、音となつている。その音は子供の声であつた。

《おはよう、みゆきお姉ちゃん!》

今置かれている状況と乖離した、明るく嬉しそうな声が自分の名を呼ぶ。そんな幼気が彼女を姉と呼ぶが、そもそもみゆきに姉妹はいない。当然、彼女は当惑した。声が出るなら彼女に何故と聞けるのに、液体に声帯が邪魔をされ叶わない。

そのもどかしさを感じる間もなく、のぞき穴からひよつこりと頭が見えた。

《よいしょ……台がないと見えないの、不便だなあ。身長が高い遺伝子で産んでくれても良かったのに》

ビリジアンにオレンジ色のメッシュが入った前髪、同時に覗かせた少女の目元。睫毛こそ長く可憐な印象が強いが、穏やかで冷静な印象を与える目つきはみゆきと瓜二つであつた。

(また、私のクローン……とは思うけど、なんか……)

ルーナの時とは少し印象が違う。間違いなく自身の血を感じる目つきだが、確信には

至れない。色が違うから、睫毛の長さが違うから、全身を見ていないから。そんな理由で違和感を感じているのだとひとまずは片付ける。

(……とにかく。私が閉じ込められたここは、ルーナの生まれた施設だということは間違いないさそう。この触手の親和性、この子と私の類似性……ルーナを生んだものと同様程度の遺伝子工学技術がそこかしこにあるわけが無い)

そんな疑いを張り巡らせるみゆきの怪訝な顔を察知してか、少女の目元もまた心配そうに眉を潜め、口元に持っていると思わしきマイクに語りかける。

《お姉ちゃん、大丈夫だよ。お姉ちゃんの体は私が治しているから。お喋りはまだできないけど、全部治ったらいっぱいお話ししようね》

みゆきは励ますように声をかける少女には気にかげず、頭の回転のギアを急速に上げていく。

(しかし、私を知っているのは何故?)

少女の存在と肉親を意味する呼び名から、みゆきは自身の両親をまず想起させる。

(……パパとママはきつと関係ない。パパは仕事の日は直帰、残業の日は絶対に居場所と帰宅見込み時間を伝える。ママはそもそもものほほんとしすぎてくるくらいだし。休日だつてずっと家にいるか映画館に行くかだし、二人共。こんなことに携わつてるわけ無い)

両親の潔白を自らのロジックで納得した後は、呼び名の理由の追求が始まる。

(なら、お姉ちゃんと呼んでいるのは施設の洗脳か教育のせい？ でも意味が無い。ルーナ達が脱走した以後なら僅かにありそうだけど、それ以前からオリジナルの私をこの施設に連れてくるなんて余計にありえない。コソコソとクローンの人身売買を行う様な所が、そんな意味不明な企みをするわけが無い……短期間に洗脳を施す技術があるとしても、こんな状況で私が絆されると考えているのもおかしい。私を直接洗脳すればいいだけだ)

考えても考えても合理的な理由が見当たらない。となれば、残る選択肢は絞られてくる。

(だったら……何か個人的な意図が働いている？ エゴがもたらす非合理的な欲望？)

自分を知っているという状況を作り出せるのは『彼女を知る者』以外には無い。故に、不信感がさらに募る。今まで生活で出会ってきた全ての人間を疑ってしまいそうな、嫌な気分を感じてしまう仮説である。

生まれた仮説は無視はできない。されど、証明されていない予測推測でしかない。だからみゆきは無理矢理に、喉の奥に人間不信の味を押し込もうとする。

(……こんな事考えるのは今はよそう。精神衛生をできるだけ保たなきゃ。ただでさえ私の体がこんな……ううん、これも考えてはだめ。生きてる事が今は最大の幸運)

そんな事はつゆ知らず、少女は期待に満ちた弾む声をマイクに吹き込んでいた。

《えへへ……あ、お名前言ってなかったね！ 私、胆礬っていうの。私、いっぱい話したいことがあるんだ。グアニンの新しい代用物質についての事とか、細胞におけるネビデ許容体の後天的負荷についてとか、お姉ちゃんならいっぱい話せるかなって！》

無邪気な声から飛び交う、一瞬理解が遅れるような用語。概ね遺伝学に関連したものであるが、その中にみゆきもしらない単語も混じっている。

だが、それについて問う術がない以上は、黙って聞く以外のことはしない。例え、気を引く内容の言葉だとしても。それが、彼女が考える最善の方法であったからだ。

（今はとにかく聞く。皆のところに戻るため、今できることはとにかく情報を集めること。変に刺激して情報を取りこぼすことは避けなきゃ……）

脳裏に浮かぶ、親友二人の笑顔。

（皆、の……依瑠光とメグの……！）

自分の身に起こった事があまりにも衝撃的過ぎたのだ。無理やりであつても落ち着きを僅かに取り戻した今、彼女たちの安否が急激に心配になってくる。

（何も、何が起こったのかすらわかってないんだ、私は。みんなが無事であるかどうか、何も、何も）

抑えているネガティブな感情がじわりと滲み、漏れてくる。それは、彼女の表情にも

現れている様子で、胆礬と名乗った少女は呼応して焦りだす。

《あ、あれ？ あれ？ もしかして、痛い？ S R O—14は神経系にも癒着して痛みも肩代わりしてくれるはずなんだけど……》

その様子に気がついたみゆきは、根の優しさから反射的に首を横に振る。

《えっと、じゃあ、さみしいの？ 私もそんな顔しちゃう時、あるけど……うーん、おしゃべりできたら早いんだけど》

《……、………る。——が………》

狼狽する少女の声に若い男の声が混じる。

《あ、縹さん！ どうし……》

マイクの音声途切れた。覗き窓から離れる少女を目で追うと、似た背丈の縹と呼ばれた男のもとに駆け寄っている所が見えた。

右肩を抑えた男の少しはねた首元までの長さの青髪のみとまり具合に、そこはかたない上品さを感じ取れる。

幾秒かのあいだ、話をしている素振りを見せたあと、少女は男から離れてのぞき窓からフレームアウトした。そして、男はこちらに寄り、顔も見えなく位置まで近寄り、表情も見せぬまま彼はマイク越しにみゆきに語りかけてきた。

《……これと言ってしまう事は非合理だが》

男の声色は淡々としていた。その声にみゆきの背筋に冷たく電気が走る感覚を覚える。その感覚に同調して、風穴に巢食う触手の塊も蠢きを増す。

《日焼けの女の足止めにしてやられた》

(日焼け……依瑠光の事？　じゃあ、この男は……！)

発言が意味する事と、脳裏にかすかに残る声の記憶との一致。みゆきがその姿を確認できぬ間に意識を絶った張本人、それが縲である事を認識する。

続く言葉に、みゆきは脳の回転数を再び上げていく。心配をしている親友たちの情報を取りこぼしてはならない。

《行動が八秒遅れ、お前たちが呼んだ女の軍人に鉢合わせて肩を撃たれた。俺の任務は成功したが、この損害は予定にない。シミュレーションと違い、予測できない変数を侮つてはいけなれないと思ひ知らされたよ》

だが、男の発言内容は欲しい情報には微妙にたどり着けない。

(他に何か言つて……！)

《……愚痴など馬鹿馬鹿しいだけだなやはり……瑠璃は一体何をモタモタし——》

その一言で、男は独り言つ時間を断ち切った。ツカツカと鉄床を歩く振動が、液体を通してみゆきにもわずかに伝わる。

(くっ……仕方ない、これで推測できるところまで……)

無力感の中、みゆきはできうるかぎりの推測をする。

（任務が成功したと言っていたけれど、その任務の内容は私を連れてくることか。理由は全くわからないけれど、これは多分確定。向こうにとつて殺して消す選択肢がある事態なのに、私が生きていることを考えるとそうなる）

これは、胆礬の語りかけの際に思考していた仮説に関連した推測。少女が自身を肉親のように扱う理由、つまり生き残らせて少女に触れさせる事。判断材料にはなるが、かし芯の部分にはたどり着けない。

（問題は、依瑠光やメグやあのお店にいた人たちも同じ様になつていないか。目的がわからない以上、確定事項は出せない。依瑠光が何らかのアクションを起こして、軍人であるドーラさんがその場に駆けつけ抵抗した時間ができた事はわかったけれど、それが皆の安否を証明するものではない）

皆の無事を祈ることとは別に、事実だけを分析の材料としなければならぬ事をみゆきは理解している。正しく現状を整理することが、正しい認識への唯一の方法である。

（以上から今できることは、あの男がドーラさんから受けたダメージで継戦不能と判断して、私だけを連れ去つたのだと祈ることだけ……もどかしい）

歯を食いしぼりたくなる現状に、焦りを堪えることが辛くなってくる。

（最後の瑠璃、というのは仲間の名前と考えるのが自然だけど、任務のバックアップのた

めの人員か、別の任務に当たっていたのか……不確定事項はいくら考えても仕方がないけれど、前者であつて欲しくない)

不安要素が多く、親友の安否を思う気持ちが更に強くなる。吐き気まで感じるが、自分の体内で蠢めく感覚で上書きされる。

(……祈ること、しかできない。状況の変化を、待つ事しかできない。私が何をしたつて言うのよ……)

彼女なりの平凡で楽しい日常生活は壊され、今や実験動物にされている様な気分を受けている。みゆきの中でふつつつと湧き上がり続ける感情が、煮立つてドロドロ口になつていく。

(私の好きなものを汚す、私から日常や友人を奪う、こいつらに一矢報いることもできないなんて……!)

彼女の怒りの業火で不安と悲哀は炭化し、冷めていく。生まれて初めての強烈な怒りが、余計な感情を縛り付けるための枷となつてくれている。

この気持ちの制御こそが今、彼女の正気を支える唯一の方法あつた。

(必ず、ここから脱出する。チャンスを見つける。そして……潰さなきやならない)

2—7 同期完了

直感的に感じた恐怖が背後から迫っていた。

そのポニーテールと巨大な乳房を揺らしながら、不釣り合いなほどの笑顔を狂氣的に浮かべ、女は三人を追ってきている。

「おらおらおらあ、もつと走りなよおー！」

異様な光景に混じる破砕音。松野が振り向くと、どういう理屈か全く分からない破壊の光景。外壁が砕け、手すりが折れる。起こってる現象の全てを女の四肢が引き起こしているように見える。

「栄翔つ、なんなんだ、あのヤバいのお!？」

「くっそ……っ!」

二階から一階への階段に差し掛かると、女が放つ全ての音が一際大きい轟音とともにピタリと止んだが、不思議に思う間もない。三人は足を止めず、踊り場を曲がってあと十四段の階段を降りるだけの位置に達する。

先に大地に降り立ったのは女だった。上の階段を貫通させ、そこから降りて先回りしたのである。

「ゲームオーバー〜！ コンティニューするう？」

舌を出した品のない笑顔をこちらに向け、首元を右親指で描き切るような仕草をしている女。体温上昇により全身に滴る汗、乳頭の充血と固化が見られ、極度の興奮状態にある事がうかがえる。

「殺さなかつたらいいって縋のズブは言つてたよなあ？　じゃあ、女は半殺しで男はやり捨てだなあ！　黒髪はあんまり乱暴するなつて言われてるけど、金髪はサンドバッグにしてもいいよなあ！　どんな声で泣いてくれつかなあ〜？」

極度なハイに身を任せ、聞いたわけでもないのに自分の思考をそのまま投げ捨てるかのように言葉を連ねる。その言動からも分かるように、自分たちの持つている常識がまるで通用しない相手。

そんな異常者の存在を察知してか、新たな来訪者の登場である。

「止まれ！」

ゲームセンター内で起こった暴動の通報を受けた男女の警察官が二人、女にテザー銃の銃口を向けた。だが、女は動じるところか両の手を広げてながらにじり寄り挑発をする。

「いいよ、撃っちゃいなよほらあ！」

十年前にテザー銃を導入してからというもの、ミヅホ諸島国保安省が執り行う重

犯罪取締率は大幅に改善した。警棒と使用が法により限定された実弾銃よりも行使しやすい制圧武具を、導入された当時から彼らは適宜適切に使い、その威力と抑止力で国民の安全を愚直なまでに守り続けてきた。

今回もその例に漏れず、二人の警察官はためらうことなく引き金を引いた。銃口から発せられた稲妻が女に走り、高電圧が女の汗を伝って制圧が完了する——かにおもわれた。

だが、倒れたのは二人の警察官だった。

「ぎゃははは！ こっちの奴らは使えないんだもんなあ！」

引き金が引かれた瞬間、警察官二人の手元で稲妻が閃光を放った。それは衆目の目からはレーザー銃の暴発だと見られるような光景であった。

不甲斐ない様子警察官を見てひとしきり嘲笑ったあと、女は右拳を倒れた一人に向けた。

「水風船は割れるまでが華なんだよお？ ばあん！」

すると、その警察官の胸部が触れられてもいないのに陥没。ちょうど心臓の位置にクレーターができ、目鼻口耳、顔面の全ての穴からおびただしい量の血が吹き出て事切れた。

「ガキどもに使えない分、パーツと使わねえとなあ！」

女はそれを狂った笑い声と共に、続けざまでもう一人のに対して同じ仕草を行う。同様に叫ぶ間もなく弾け飛んだ血液は、やがて壁面の染みになるのである。

「楽しいねえ！　なんかすつごく楽しいぜ、外つてさあ！　知らない人間は潰し放題だし、いっぱい見られちゃうしさあ！　縹と主任からは目立つなって言われてるけど、そんなもつたいたいことできないよなあ！」

女は振り向き、栄翔達がいる方向に拳を向ける。だがそこはもぬけの殻の踊り場だ。「あーっ！　さいつてーだ、逃げやがったガキども！」

女が警察官に気を取られている間に、三人は半壊した階段を駆け上がり屋上に登った。こここそが栄翔とパツヘルの初邂逅の現場だ。ここが運命の特異点であろうが、思ひ出に浸る気など起きるわけがない。

今現在、恐怖と焦燥感は給水塔の裏で息を潜める三人の心理を蝕み始めている。

「くそつ、出汁子のやつ電話に出ない。メッセージも既読がついてそれだけだ」

「こつちも駄目、ルーナの端末と繋がらない。向こうにも追手がいるという事？」

助けを乞う事も叶わず、急ぐ心を締め付ける。同じく追手の襲撃に会っている最中なのか、終わってしまったのか。この事態が他方にも広がりを持って展開されているのだと、もはや自分達だけのトラブルではないことを想像させてくる。

だとしても、生きようとする強い本能が諦めることを許さない。女のことをまずはどうにかしなければならぬのだ。たとえそれが、人智を超える暴力が相手であるとしても。

「なあ、階段壊しまくってたあれ、どういう手品なんだよ」

「わかんねー。原理が分かったところでどうにかなるとも思えないけどな……」

コンクリートの壁を殴り壊す、踏み抜いた段差を粉々にする女の周りで、不自然な程に軽々しく破片が飛ぶ。その恐怖の刹那の記憶の中、女の拳に一切血がついていなかったのではないかと気がついた。アレだけの衝撃なのだ。鎧武者でもなければ肉体に傷の一つや二つがつかなければおかしい。

「拳に衝撃波をまとわせて触れずに殴るって？ アニメじゃんか」

「そんなんじや、今来た警察が相手したってなんとかなるかも怪しいんじや……？」

辿り着いた荒唐無稽な結論だが、その判断を断定する他無い状況がさらに苦しい。三人一様と同じ気持ちである様子で、数拍の沈黙が発生してしまうが作戦会議は続く。

「俺達、他の階から迂回して外に逃げた、って勘違いして何処かに行ってくれりゃいいんだけどな」

あえて外に逃げずに屋上に隠れる。追跡者の心理を逆手に取ろうとした逆転の発想は。パツヘルル案である。しかし、当の彼女に最善の一手を取れた自信はない。

「時間稼ぎにしかならないかもしれない」

そんな彼女の不安を否定する様に、栄翔は彼女の目を見た。

「いや、多分これが一番だ。人をためらいなく殺して進む暴走列車相手に、人を隠すは人の中なんて通じないだろうし。それに、最初に振り払えたとしても、いずれは追いつかれてオレ達のスタミナ切れのほうが多く来る」

「だけど、……だって！」

彼女の声は震えていた。荒らげた声を出したことに気が付き、体を自分の腕で覆って心を無理矢理に落ち着かせようとしている。

施設にある小説では、希望を絶やさず燃やし続ける主人公が登場する物語が流行っていた。パツヘルもその物語の読者であった故に、絶望を前に希望を持つ事がこんなにも難しいとは考えてもいなかった。

目の前の彼はまた違う考え方を持っていた。

「……イチかバチかなら」

見据えた目を栄翔は逸らさない。緊張の面持ちは同様だが、次を見据えている人間の目をしていた。

パツヘルはそれを強がっているのだと解釈した。実際、空元気の側面もあった。

「都合のいい方法ないわ」

諦めるように放つパツヘルの言葉がだ、栄翔も頷いている。

「わかっている、もはや賭けだ。さつきから送っているこのメッセージをあのカルト狂に知らせる事とかな。警察はもう来てるけど、どうなるか」

栄翔の回答は（他人任せ）。三人の少年少女に對抗手段はないと思わされる上に、無理がある確率の薄い作戦。あまりにもお粗末ではないかと、松野は思わず栄翔を睨む。

「だからわかっているよ。けれど、うまくいって助かる見込みがあるのはこれが一番高い。山本秋江のイカれっぷりと頭の回転……知ってるだろ、アイツのヤバさ」

納得する他にないのか。煮えきらず俯く栄翔以外の二人。未だやりとりができていない相手を持つなどとは、本当に博打をするようなものである。

栄翔自身もそれは当然理解していた。

「それに、策はもう一つある。ここの立地だからできる不意打ち……それと、未知の力」
「なんだって?」

自分たちで解決する手段だって、問題解決には必要なのである。

塔屋の重い鉄製の扉が、自動車に跳ね飛ばされるがごとく大きな音を立てて吹き飛んだ。フェンスを超えて、落下した音と同時に通行人の悲鳴が空に響いた。

「カノンの座標はこのビルから動いてねえ」

扉があつた鉄枠から、間を置かずに女が現れた。栄翔たちを探すため、キヨロキヨロと落ち着きなく屋上を見回している。

「どうもビルの中にはいないんだよな。逃げ場のない屋上に逃げるなんて馬鹿な奴ら、興ざめだ！ 追っかけっこしようぜ、なあ？」

意図的に声を張り上げて一人話す女の頭上、塔屋の屋根から影が降ってきた。

「不意打ちしたってさあ！」

女は体を翻して身を躲し、同時に落ちてきた影にアツパーカットを放った。

拳が直接触れる前に、乾いた破裂音が響く。それは肉が鳴らせる音ではない。

「やべっ、使っちゃまっ……ああ？」

降ってきたのは空のプラバケツだった。彼日に栄翔が秋江のスタンガンを無効化するため塩水をばらまいた際に使用したもの——だった破片が彼女の頭上から降りかかる。

「上にいたってっ！」

すかさず彼女はバケツが飛んできた天井に、躲した動作の軸足の瞬発力みでその身を到達させた。

足をつくや、彼女はその腕を構える。だが、対象の姿はない。

「んだあ？ 上から降ってきたよなあ？」

喚く声に続き足音が二つ、天上下から聞こえた。

反応する女の動きは雷のごとく早い。足元の天上に腕を向け直し、コンクリート製のそれにいくつもの穴を瞬時に空けた。梁が崩落し、塔屋の入り口は崩れ去り、足音の主は逃げ場を失う。

「ええ〜？ 金髪のヤツ帰っちゃったのお？ 残念だなあ！」

「……………」

松野の姿はそこにはない。二人はただ警戒する態勢で、悠々と立っている女を見据えている。

「ま、逃げたって別の奴らが潰しに行くんだろけど。サンドバッグ似できないのは残念だけどまあ、今は楽しもうぜ〜。生きたいっしょお？」

「っー！」

突然に距離を詰めてくる女。背の低さを利用して栄翔の懐に潜り、視界から消えた。

「エイトっー！」

パツヘルの声掛けとともに、振り上がった拳が栄翔の鼻先をかすめる。バックステップの反応速度の速さに、女は驚きの表情を浮かべ距離を取る。

「お前ら、なにか手品やってやがるな？」

ほぼ確実に当たらずだった打撃が空を切った理由、それは直前のアシレボに兆しが

現れていた二人の『同期』。

(複雑だけど)

(狙い通り、か?)

未知の力。パツヘルが言うカタログとやらに記された繋がりの目覚めを、二人は先のアシレボ対戦にて直感として認識していた。動きの良いパツヘルと反射神経の良い栄翔の長所が同期し、双方ともに通常の自分よりも動ける状態になっていた。

(わかつてる)

(気味が悪いけど)

(今はこれしか無い)

例の金属がしなる様な音に混じり、お互いの心の声も透けて聞こえる。

(せーのっ)

思考に響く合図に、遅延なく二人は別方向に散開した。同じ歩幅、同じテンポで女を挟む様に位置する。

「的を絞らせないってかあ? それでオレの相手できるとか思ってるってえ?」

女は二人を交互に視界に入れながら、腕の構えを少し変えた。足元はどつしりと構えたものから、瞬発力を利用するようなつま先中心の動きが見て取れる。

「浅すぎるだろーがよお!」

一気に距離を詰めてくる。まず狙うは栄翔。

(集中っ)

(左からくる！)

栄翔は女の蹴りによる初撃を躲した。紙一重だ。

(眼が四つあるって)

(滅茶苦茶見える！)

一拍も置かずに放たれる二撃目三撃目も躲すことができるのは、女の背後にいるパッヘルとリンクした視覚が予備動作を用意に捉えることに貢献しているためだ。

栄翔に気を取られているうちにパッヘルは女に蹴りを入れる。女は気づいて振り向き、腕でガードを入れる。視界の外に出た栄翔が距離を取り、息を整えながらパッヘルの回避動作を手助けする。そして栄翔も背後から蹴りを入れに行く。これを繰り返す。

未知の力を使われては勝ち目がないが、しかし女は自分たちのことを『殺せない』と発言していた。故に、コンクリートを破砕するほどの能力は使用しないであろうという判断も的中していた。

今日で二度目の対面であるはずの二人は今や、一心同体のコンビネーションを繰り返している。

「やるじゃんやるじゃんやるじゃん！」

二人の同期が高まることと同じ程に女の体の動きがどんどんと早くなってくる。両者ともにボルテージ上昇の天井が近づいてくる。

その時は間もなく訪れた。

「終わりイッ！」

二人の連携が四度目の終わりを告げようとした時、女が突如腕を上げた。

二人の気道に流れ込んでくる異物。その正体が液体だと気づくのに時間はかからなかった。

この瞬間に足元から現れ、体を這い、全身を包むように纏わりついた水。突然の怪奇現象によって、二人はその場でうずくまりもがき苦しむ。

そんな二人に女はご丁寧に、一発ずつの蹴りを腹部に御見舞する。二人に纏わりついた水から気泡が大量に溢れ出す。

二人に纏わりついた水は形を維持する力を失って、溢れるように床に広がった。されど二人が起き上がるわけもない。急速な酸欠状態、腹部のダメージ、何よりリンク状態にかかった心身の負担からくる疲労感。咳込みながら意識を保つことでやつとの状態である。

「お前らの『ネビド』は中々珍しいが、初めての相手がオレなのは運が悪かったなあ！」
「ね、ビ……ど……ど……」

女が発した意味不明な単語を聞き取りかろうじて意識を維持している。だが、女は回復を許さない。パツヘルの上にいかとを上げ、踏み潰そうとしている。

「もつたないよなあ、そんな力がありながら歯が立たないなんてさあ！ もつたないと思いつながら潰れるお！」

力を込めてかかどが振り下ろされる。

「うわあああつ！」

女のすぐ背後から叫び声が響いた。だが栄翔のものではない男の声だ。女はかかどを下ろすことをやめて、声の方向に振り向き腕を上げて防御行動に出た。しかしそこには誰もいない。

女の顔に影がかかる。見上げると、松野が宙に浮いている。

「金髪ツ！」

松野の膝は女の鼻っ柱に当たった。策が見事の中した瞬間だった。

バケツによる罫で塔屋天井に誰も潜んでいない印象を根付かせ、その上で栄翔たちが塔屋付近で罫になる。何とか凌いでいる間に松野が塔屋の天井に上り、重力を味方につけた襲撃をかける。

状況による錯覚を仰ぐ。これが栄翔の打開策だった。

「栄翔、パツヘル、やったぞ！」

動かなくなった女に馬乗りになり、栄翔たちに笑顔を見せる松野。明るく嬉しそうな声に栄翔とパツヘルは歯を食いしばり、子鹿のような足取りで立ち上がり松野に加勢する。

「よ……し！ あとは、ゲホツ……」

「おい、無理すんなよ！ このテープでぐるぐる巻きにしてやればもう安心だって、言わなくても分かるしさ！」

二人に松野は屋上の納屋から取り出したであろうカートンテープを剥がす音とともに、女の態勢をうつ伏せに変えようとして、体重を一瞬女の体から浮かせた。

虚空をむいていた女の眼球が松野の方向に視線を変えた。

「俺ん体に触ったな？」

「え？」

その瞬間、松野の腹部に衝撃が走った。

胃酸が鉄の臭いと混じって逆流し、松野の喉から飛び出て女にかかる。

「松野おっ！」

「うえ、ばつちい。こんのエロガキがよお……くそつ、めつちやいてえ。殺すつもりでやってやったのに弾けちまった。鼻が痛すぎて鼻血も出るしで、集中力足りてねー」

白目をむいて女の乳房に顔をぶつけるよう倒れた松野。膝蹴りで引き剥がされ地面

に投げ捨てられた彼の腹部は服が破れて露出し、皮膚が断裂して出血している状態が見える。

「でもまあ、こいつらいたぶって殺すにやあちようどいいか」

女が栄翔とパツヘルに腕をかざすと、再び水が二人に纏わりついて飲み込んだ。

「待ってろ。次テメエらだ、よっ!」

女は松野を蹴った。足を、腕を、胸を。全身をぶつ壊してやろうとする怒りをさらけ出し、鼻血と吐瀉物にまみれながら笑顔で蹴っている。

(や、やめて……)

(こいつ……!)

酸欠状態ながら、栄翔とパツヘルは再び自分たちをリンクさせ、女に向かっていく。だが、その様な状態では女に歯向かうことも叶うわけがない。

「順番の意味わかってねーのかよお! 別に先に死んでもいいけどなあ!、ぎやはははははは!」

二人は裏拳で容易に倒れてしまう。衰弱が早まるだけの結果に終わってしまう。リンク状態の高まりを表すのであろう金属がしなるような音も徐々に弱まっていく。

(くそ……オレ、オレたちここで終わるって……?)

(いや……そんなの、いやだ……)

朦朧とする意識すらもついには途切れようとしている。すでに視界は暗くなり、しなり音がわずかに聞こえるのみとなって、ただその時を待つ状態。もう為すすべはない。

為すすべは、ない——

——本当に？

(耳鳴りが——音が変わる)

(体の感覚が——溶けていく)

二つの波動が、完全に混じっていく。

「……俺の水が消えてやがる？」

気道が開き、咳込む栄翔とパツヘルに気が付き、女は松野を痛ぶる手を止める。

二人の体に纏わりついていた水膜は剥がれ、床に溢れていた。

「松野を……」

「放して……！」

完全に同期したタイミングで二人は声を出している。向かってくる足は変わらさずおぼつかない。だが、女は本能的に異変を感じてる。

「お前らが、ネビドを……おいおい、覚醒しやがったつてえ？」

何かを知っているのか、女はハツとした素振りを見せた瞬間、二人に対して距離を詰め、拳を放つ。拳の軌道は確実に栄翔のこめかみに直撃する動きであった。

そして間もなく拳が到達すると、女の拳から肘にかけて、規則的な螺旋の模様を描くように肉が裂け、鮮血が吹き出した。まるで、打撃が反射されたかのような速度であった。

「ネビドも発動しやがらねえっ?! やっぱりやりやがったなあつ、てめえラアツ！」
痛みと焦りが女の体を支配する。流していた汗が全て脂汗に変わる。

女は本能的に判断した。バックステップで松野の側によると、彼の首ねっこを掴んで持ち上げ、二人に見せつけるようにしている。

「一歩でも動いてみろお! こいつ殺すからなあ!」

人質だ。当然ながら、二人は動けない。

「……………」

言われるままにしているのか、二人は立ち尽くしてただ見ている。

「そうだ、そのままでもいいよ……」

女は少しずつ後ずさりをし、塔屋の方に近づいていく。

友人のピンチの中、栄翔とパツヘルは、落ち着き払っていた。

（今、感じているこの音に従って）

しなり音から変化した単音が、

（イメージをするだけで、良い）

二人の心を導いていた。

それを二人が自覚した時、女の体に振動が走った。

断末魔を上げる間もなく、女は全身の力を失い倒れる。

「本当に、できた……」

二人もその場で地に伏した。負担が蓄積したその体はすでに限界であった。

2—8 疵

《——ええ。こちらは無事、ゲームセンターの屋上で九音たちを見つけました。全員意識不明でした。かなりギリギリの死線をくぐってきたみたいです》

《軍の医療を受けさせてもらえららしいです。ウエツジシヨットさんとモーリスさんが出てくれて助かりました。警察も口出しできない駐留軍の治安干渉権って悪い印象しかなかったけど、こういう時は役に立つんですね》

《それと、側で倒れていた気持ち悪いくらい胸のどかいチビの筋肉青髪女がいるんですが……え？ 情報量が多い？ 仕方ないじゃないですか、本当にそんな見た目なんです。私達を襲撃してきたあのチビ男と似たようなところもありますよねって話ですよ、これ》

《この女は軍が収容、監視してくださいさるそうです。はい。さっきのあれもありますから、わたしたちには手に負えない可能性が大でしょうし当然ですよね》

《……会長、そっちはどうです？》

「心配する暇があるなら早く帰ってこい。これからのことを決めねばならん」

後輩兼部下の声に、通話音質でも心配の色が乗っている事がわかる。山本秋江は少し

目を伏し受け答えをしながら取り急ぎ片付けられた事務所の様子を眺めている。一部に残る肉片、拭いきれていない血痕、隅に固められる壊れた家財。先程までの騒動が現実である事を物語っている。

数刻前に小柄な男が乱入し、永野みゆきに対する攻撃を行った様子が、この場にいる全員の心に不可逆的な変容を誘起させていた。正体不明の目に見えぬ飛び道具を使い、容易にみゆきの体と部屋、取り出された秋江のスタンガンを破壊した光景は、荒唐無稽なCG合成映像の様であった。

中でも深刻な心の乱れを引き起こされたのは、永野みゆきの親友の一人である木野春メグであった。怯えきり、部屋の隅で肩を震わせてうずくまることしかできない様子は、普段のおちやらかな言動からは想像できないほどに暗く、重い。

「みゆきちが……みゆきち……」

「メグ、お茶飲めるか。なんか飲んだほうがええで」

メグの側にペットボトル入りの緑茶を置いた堂本依瑠光の顔は大きく腫れ、全身に内出血や赤くなっている部分があった。痛手を負いながらもその声色は優しい。

目の前でみゆきが爆ぜ、次にメグに歯牙がかけ様とした事に対し、気が付けば体が動いて男に殴りかかっていた。しかし拳はいなされ、逆に顔面にカウンターパンチを受けてしまったが、依瑠光は男に組み付き動きを鈍らせた。

それが結果的に、それ以上の被害を抑えることに貢献した。

「あの時、依瑠光ちゃんがああ男の動きを止めていてくれなかつたら……他に人が死んでいた」

MARVEL・AGRIの店主アグリは気丈に振る舞う依瑠光を励ましにかかる。

依瑠光が組み付いている隙に、彼女は空中に薄青色の細切れ紙片をばらまいた。この瞬間、男の表情が変わった。

おそらく、男がみゆきを捉えた謎の攻撃を依瑠光にも放とうとした時、その紙片が砕け散って粉になった。はしけ飛ぶはずだった依瑠光の頭部への衝撃が、男を含めた周辺に衝撃が拡散。依瑠光へのダメージは全身への打撲に軽減されたのだ。

その後、メグが呼んでいた駐留軍のドーラが到着するや異変を察知し、すぐさま事務所に駆けつけ拳銃にて応戦。男の肩に銃弾が命中した。

男は不利と判断してか、身を躲す動作を兼ねて血まみれで倒れているみゆきの側に転がり込んだ。そして、男は腰につけていた手榴弾のようなカプセルのボタンを押した。

「あのチビ男、みゆきと一緒に消えよった」

それが一瞬の閃光を放った瞬間、男とみゆきの体の境界が消え、その場からも姿をくらましてしまったのだ。

ドーラの通訳も兼ねてゲームセンターに向かい、今この場にはない出汁子には軽いめ

まいが起こったという。あの日、パツヘルとルーナがこちらにやってきた日に出汗子の身に起こった現象と類似した感覚である。秋江はそれを聞き、男が消えた原理は『裂け目』の発生原理の応用であると推測した。

「……店主さん、あんた何もんや。なんか知ってんねやろ」

命を助けてもらったとはいえ、依瑠光はアグリに疑念を抱いていた。

アグリの行動は男の攻撃のからくりを知っていなければ起こしようがない。みゆきがああなってしまうことも。この女は全てを知っていて今の振る舞いをしているのではないかとさえ思ってしまう。

アグリは依瑠光に視線こそ合わせているが、眉を潜めて困っている事がわかる表情だ。

その険悪な空気にルーナが割って入る。

「あの、あのね、店主さんは敵じゃないと思うよ、依瑠光ちゃん」

みゆきと同じ声同じ顔で仲裁に入られる。依瑠光は感情的にならざるを得ない。

「……っ、わからんやろ！ 友達あんなんされて、連れてかれて、ウチらこんな怖い目に会うてや！ そつからウチら守ったんは店主さんで、あんなん分かってへんかったらでけへん動きやんか！」

「でも……店主さん、パツヘルちゃんと私の面倒みてくれて、優しい人なんだよ。店主さ

ん、絶対味方だよ」

みゆきと同じ真っ直ぐな眼差しだった。

普段は挙動不審でどこかふにゆふにゆとした印象のみゆきが時折見せる曇り無き眼子は、決まって彼女の芯の強い意志を押し通そうとする時に見せていた。

だから、依瑠光は狼狽し黙ってしまう。

「イルミ、だっけ？」

続いて依瑠光に話しかけたのはMARVEL・AGRIの店員であるレイナとキリだ。一六〇cmと一一〇cmの凸凹姉妹のような彼女たちもアグリに恩がある二人であり、住み込みで働く訳アリの二人であった。

二人も男の襲撃に会った。身の安全を確保するために物陰に隠れて大事には至らなかったが、それでも落下物に当たって軽いけがなどを負った。なおかつアグリの特異性にも気がついてはいるが、彼女たちはアグリの味方だった。

「店長をいじめないであげてほしいな。私達にとって、とても頼りがいのあるママみたいな人なの」

「気味悪くて胡散臭い奴だけど、人を殺す野蛮な魔女ではないよ、この女」

娘のようにアグリの愛と善性を押し出すレイナ、ぶつきらぼうながらアグリの悪性の天井に言及するキリ。

言い返せぬ依瑠光と二人の様子にアグリは頭を垂れた。

「依瑠光ちゃん、全てをお話しましょう。ですが、きつと望む様な答えでは無い事、先にお詫びしておきますね」

依瑠光は四人の心を見せつけられ、頭をかいてバツが悪そうにそっぽを向いてしまふ。

「……あーもうホンマに。そんだけ言われたら分かるしか無いわ。悪いのはあの男、せやけどちゃんと聞かせてもらおうで」

そしてこの話に乗っかるように、秋江も続いた。

「私も聞かせてもらおうぞ。前々から知っていることも分かっていることと聞いてずっと聞いているが、『裂け目』について、向こうの世界について、必ず詳しく聞き出すからな」

「それは、まあ……はぐらかしてばかりも居られませんよね。わかりました、秋江ちゃんにもお話します」

秋江はアグリ of 返答を、包帯でぐるぐる巻になった右手をさすりながら受け入れた。スタンガンが爆発した際の火傷の痛みが彼女の気持ちをさらに強くしている。

「必ずだ、今回ははぐらかすなよ」

「ええ。ですが、まずは情報の整理とこの部屋の片付けを済まさなければなりません」

傷跡は深い。だから応急処置は全ての問題解決に繋ぐ為の必要事項だ。順番を間違

えてはいけない。

しかし、その様な状況である時に限って、問題は更に重なっていく。

「……………ん？」

依瑠光のスマートフォンに着信。バイブレーションが長く響く。

事が起こってから一時間弱、日が暮れてきた頃であるから親が心配するような時間ではない。まして、友人が遊びに誘うような時間でもない。

依瑠光の胸中には嫌な予感だけが募っていた。

「誰や、こんな時に」

スマートフォン画面をつけると、着信者の名前と初期設定ままのアイコンがデカデカと映し出されていた。

表示名は『お兄』。

「……………うわ」

依瑠光は顔をしかめ、着信拒否をした。